古代ゲルマン語の* *swā hwas swā* (＝*sô hwer sô*) 構文をめぐる周辺の問題

手 嶋 竹 司

(I)

古代ゲルマン語といっても表題の構文が現れるのは主に西ゲルマン語ではあるが，この構文の成立に関わる問題を考える場合には，東と北のゲルマン語をも視野にいれて論じる方が西ゲルマン語のこの問題における特質をより鮮明にすることができると思うので，本稿ではこの視点からできる限り比較と対照の方法を基本に据えて研究を試みることにする。

ここに掲げる問題はこれまでにも研究者によってしばしば論及はされてはいても周辺のこととして扱われることが多く，真正面から取り組んでいる学者はそれほどに多くはない。なおかつこの問題に対する考え方や見解にもかなりの相違がみられるのがこれまでの実状である。この問題に多少なりとも関わりのある著作や論文のなかの代表的なものについては論を進めるなかで取り上げることにして，差し当ってはその主なゲルマニストの名前を上げるにとどめて，詳しい論評は適宜おりにふれておこなうことにしたい。その学者といえば，O. Erdmann, O. Behaghel, I. Dal, R. P. Ebert, それに D. Wunder の名前をあげることができる。

本稿の中心の課題に入る前に些か回り道をすることになるが論旨の都合上どうしてもその繁を避けて通るわけにはいかない。というのも当面の問題に関して言うならば，これまでは研究の対象は西ゲルマン語の領域に焦点がしぼられていた嫌いが強いようにうかがえるので，北および東ゲルマンの言語にみられる同じような現象とを比較対比することによって，それぞれの特性ならびに特質を浮き彫りにしたいという希望と意図があるという理由にもよる。

論旨をすすめる過程でも明らかにされると思うが，それぞれの言語の表層に現れる形式の上では懸隔はあっても，その成立の深層に流れるものはほぼ軌を一にしている。このことはともに姉妹語であるという事実にてらして考えるならば別段奇とするにたりない。

そこでまずはじめに表題の構文 *swā (h)wer swā* の核心部分であるところの *(h)wer* の意味と機能について考えてみたい。この語のゴート語形は *hwas*，古代ドイツ語形は *(h)wer*，古英語形は *hwa* であり，その意味も語源もともに現代ドイツ語の *wer*，現代英語の *who* と同じで，この語の対語であるゴート語は *hwa*，古代ドイツ語は *(h)waz*，古英語は *hwaes* であって，現代ドイツ語の *was*，現代英語の *what* にあたる。これらの語は語形からも察せられるように本来疑問詞である。しかしこれらの疑問代名詞は疑問代名詞としてのほかに不定代名詞としてももちいられ，ときには現代ドイツ語の *jeder, jedes,* またときには *irgendeinim, etwas,* 現代英語の *anyone, anything, someone, something* を意味する。このことは J. Wackernagel (1950. 11. 114[1]) も指摘しているように多くの言語に共通する事柄であって，たとえ

ば日本語においても「誰」という疑問代名詞はまた同時に「誰か」または「誰でも」といった不定代名詞にもなることをもってしても理解できることである。しかしこれらの語が不定代名詞として用いられることについてはある種の条件が必要である。その条件というのは以下にみるように，これらの語があらわれる文が条件文，否定文もしくは疑問文であるということである。このことを確認するためにそれぞれの文の種類について例文にあたって確かめてみよう。ここで例証に入るまえにあらためて想い起こしておきたいことがある。前に疑問代名詞がそのままの形で不定代名詞にもなるということを述べたが，ギリシャ語やラテン語でもその事情には変わりはなく，例えばギリシャ語では τίσ が，そしてラテン語では *quis* がそれぞれにおいて疑問詞と不定代名詞の機能を兼ねていることを念のため申し添えておく。

1) 疑問文（Fragesatz）の場合

ゴート語では（aus der gotischen Bibel）

1. K 10,19

hwa nu qiþam? þatei þo galiugaguda hwa sijaina aiþþau þatei galiugam saljada hwa sijai?

（ところで私は何ともうしたらよいのやら。偶像とはなにかあるものというべきか，それとも偶像への供物とはなにかあるものというべきか）

1.K 6,1

gadars hwas izwara, wiþra anþarana staua habands stojan fram inwindaim?

（汝らのうち誰か他人を相手に敢えて不正者の前に訴えて出るものありや）

Mk. 8, 4

hwaþro þans mag hwas gasoþjan hlaibam ana auþidai?

（このような荒野で誰がこのものたちにどこからパンを買い求めることができようか）

古代ドイツ語

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《Tatian》）

231,1

habet ir hier waz thaz man ezzan megi?

（汝らここに食べられるものをなにかもっておるか）

2) 否定文（Verneigungssatz）の場合[2)]

ゴート語（aus der gotischen Bibel）

2.Th.3,8

nih arwjo hlaib matidedum at hwamma, ak winnandans arbaidai naht jah daga waurkjandans, ei ni kauride-deima hwana izwara

（誰にもお金を払わずにパンを食べることはしない，汝らをも煩わすことのなきようにと夜となく昼となく仕事をしてかせいでいる）

1.Th.4,12

ei..... ni ainishun hwis þaurbeiþ.

（一人として何不自由のなきようにと思いて）

古代ドイツ語

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《Tatian》）

104,1

nioman giwisso in taugle waz tuot,

（誰も隠れて密かに何かをするいうことはない）

132,19

fon werelti ni ward gihôrit thaz wer gioffanôti ougun blint giboranes,

（この世の始まりよりこのかた誰かが目の見えない人の目を見えるようにしたというようなことは聞いたためしがない）

Otfrid から（aus dem althochdeutschen 《Otfrid》）

IV.1,23

ni scrîb ih thaz hiar allaz,

joh hiar ouh ni firlâze nub ih es waz gigruaze;

（私はここにそのことを残すところなく書き記すことはしないが，またそのことに関して何かをのべずじまいにすることもしたくない）

古英語

Beowulf から（aus dem altenglischen 《(Beowulf》）

3010f

ne scel ānes hwaet

meltan mid þām mōdigan, ac þāer is māðma hord,

（ただほんの一部のものだけがその勇気ある人とともにとけてしまうことなかるべし，いや，そこには宝の山がある）

これまでのところ例文相互の間には殆ど完全といっていいほどの一致をみた。しかし古代ドイツ語にははやくにこの疑問代名詞を不定代名詞として併用するのを避けようとする傾向があらわれる。すなわち疑問詞形不定代名詞に代えて *ioman*（現代ドイツ語 *jemand*）ならびに *iowiht*（現代ドイツ語 *etwas*）がしだいに多くつかわれるようになる。このことは後ほど述べることと関連があるので一例をあげておくと，

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《Tatian》）

176,2

inti nist dir thurft thaz thih ioman frâgê

（誰もあなたに問い質すことはあなたには要のないことです）

この Tatian の例文をつぎのゴート語のこの部分の訳文と比較すればよりはっきりする，

ゴート語 から（aus der gotischen Bibel）

J.16,30

jah ni þarft ei þuk hwas fraihnai

両者の違いは一目瞭然で，ゴート語が疑問詞を使っているのに対して，Tatian 訳では *ioman* とまったく新しい語で訳している。この一例が示すごとくドイツ語で疑問詞が不定代名詞としての機能をもたなくなったことは何らかの影響をほかのところに与えないということはまずありえないであろう。

3) 条件文（Konditionalsatz）の場合

ゴート語 から（aus der gotischen Bibel）

L.9,23

jabai hwas wili afar mis gaggan, afaikai sik silban jah nimai galgan seinana

dag hwanoh

（もし誰か私についてこようと思う人があるならばおのれ自身を捨て毎日おのれの十字架を担え）

L.19,8

jabai hwis hwa afholoda, fidurfalþ fragilda.

（もし私が誰かからなにかを盗みとるようなことがあれば，その四倍のつぐないをする）

ここでもう一度このゴート語訳と Tatian 訳とを比べてみると

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《(Tatian》）

114,2

oba ih in sihhiu welîchan biuêhnôta, ih giltu fierualt.

Tatian 訳ではラテン語の *quis* が（*h*)*welih* で，さらに加えてラテン語の *quid* が *in sihhiu* というドイツ語特有の新しい語をもちいて訳されて，ここにも工夫がみられる。もう一つゴート語からの例文と，Tatian からのと比べてみると

ゴート語 から（aus der gotischen Bibel）

Mk.9,35

jabai hwas wili frumists wisan, sijai allaize aftumists

（もし誰か最上の位にありたいと思うものがあるなら，すべてのもののうちの最も位の低いものになるがよい）

古代ドイツ語

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《Tatian》）

94,3

oba wer wili furista wesan, ther ist allero iungisto

（もし誰か最上の位にありたいとおもうものあらば，そのものは最も未熟な者ものである）

このところでは Tatian とゴート語訳とはともに疑問詞形不定代名詞をつかっている。このことからも古代ドイツ語に揺れのあることが知られる。また古代ドイツ語の Isidor にこのことをわれわれに教えてくれる次のような好個の例文を見ることができる

Isidor から（aus dem althochdeutschen 《Isidor》）

6,15

ibu dhanne einic chilaubit, dhazs dhiz fona cyre persero chuninge sii chiforabodôt,

（もし誰かがそのとき Cyre Persa 王によってこのことが前もって予告されていたと信じるならば）

Isidor ではラテン語の *quis*（不定代名詞）が *einic*（*irgendeiner*）で訳されているが，ここにも古代ドイツ語の動揺をみることができるように思う。

Otfrid から（aus dem althochdeutschen 《Otfrid》）

III.7,49

ob iz wâr zi thiu gigât　　thaz man thia diufî ni firsât,

（もし人がそのことの深淵なることを理解しないというような事態がどこかで起こるならば）

古サクソン語

Heliand から（aus dem altsächsischen 《Heliand》）

1521

ef man hwemu saca sôkea, biseggea that wâre.

（もし人が誰かに訴訟をおこすようなことがあれば，己の真実をかたれ）

古代ドイツ語

Tatian から（aus dem althochdeutschen 《Tatian》）

92,4

oba thu waz mugis, hilf uns miltenti unser.

（もし汝なにごとかなしうる力があるならば，われわれを哀れと思し召しわれわれをお助けくだされ）

古英語から

Laws of King Alfred. 6

gif hwā on circan hwaet *þ*eófige.

（もし誰かが教会でなにかを盗むならば）

The Gospel according to Saint Matthew in Anglo- Saxon and Northumbrian Version. 21, 3

gif hwa ēow aenig ingc tōcwy.

（もし誰かが汝になにごとかを言うならば）

最後の古英語の例文にも条件文であるにもかかわらず現代英語の *any* の古い語形がつかわれているが，その一方でその前の例文では同じ条件文でありながら *hwaet* と古来からの疑問詞形不定代名詞が用いられている。これは古代ドイツ語の場合と同じことが古英語についても妥当することを物語っている。すなわち古英語でもすでに疑問詞形不定代名詞は過去のものとなりつつあったということにほかならない。

古アイスランド語

Edda から（aus der altisländischen 《Edda》）

Hávamál 121

sorg etr hiarta, ef *þ*ú segia né náir

einhveriom allan hug.

（もしお前に誰か胸の想いを打ち明けることのできる人がいなければ心配が心を食い物にするぞよ）

古アイススランド語の Edda の詩に使われている *einhverr* は *einn* と *hverr* との合成語であって現代ドイツ語の *einer* と *wer* が合成されたてできたようなものである。だからこれをもって直ちに古アイスランド語に疑問詞形不定代名詞なるものが存在したことの証明にはならないにしても，この合成語はかつて以前にはそのような語法のあったことを傍証しているものとおもわれる。

4) 譲歩文(Konzessivsatz)の場合

ゴート語 から（aus der gotischen Bibel）

an die Galater 2, 6（ガラテア書）

af paim *þ*ugkjandam wisan hwa, hwileikai simle wesun ni waiht mis wul*þ*rais ist,

（一廉のものであると思っているものの目からは，いつかのむかしどのようなものであったに

しろ，私にはさして気になることではない）

古英語から

King Alfred's Anglo-Saxo version of Boethius

De Consolatione Philosophiae. 70, 32

ðáh hwaem swá ne *þ*inc

（誰にもそれはそういうふうには見えないけれども）

ゴート語のガラテア書からの引用文は必ずしも譲歩の文とはいえないが，構文全体の醸し出す文意が譲歩的であるというのに加えてゴート語の *hwa* が現代ドイツ語の *etwas*，現代英語の *anything, something* に共通する意味をこのような細部にいたるまで持っていたことに注目しておきたいとおもう。

ところでこれまでに列挙した数多くの例文の殆どがほぼ一様に示すところからも推し計られるように，他の多くの言語の場合と同じく，古代のゲルマン語においても一般に疑問詞とよばれる語詞，なかでも疑問代名詞は語形を変えずに，そのまま不定代名詞としても機能することができたが[3]，しかしそれには一定の条件が設けられていた。その条件というのは今日の英語の *anyone, anything* の場合の条件にだいたいにおいて照応することは既に上に述べた通りである。

英語にはこのような *any* の用法に対してその対語ともいえる *some* のあることはいまでは衆知に属する。この英語の *some* の古形 *sums*（古代ドイツ語，古英語ともに *sum*）にも英語の *some* に対応する用法すなわち疑問詞形不定代名詞の対概念を表す用法のあることが以下の用例から知ることができる。

ゴート語から（aus der gotischen Bibel）

L.8, 45,46

hwas sa tekands mis?　　taitok mis sums;

（誰が私にさわったのか。（たしかに）誰かが私にさわった）

J.11,1

wasuh *þ*an sums siuks.

（そのとき誰か病めるものがいた）

古代ドイツ語

Ludwigslied 52（aus dem althochdeutschen《Ludwigslied》）

suman thuruhskloug her,　　suman thurhstah her

（彼が切り殺した者もあれば，刺し通して殺した者もあった）

Ludwigslied 13

sume sâr verlorane　　wurdun sum erkorane.

（ただちに破滅したものもあれば，（永遠の幸福）へと，えらばれたものもあった）

Isidor 19,11

in dhrim fingrum chiwisso dher heilego forasago dhea dhrifaldun ebanchiliih-nissa dhera almahtigun gotliihhin mit sumes chirûnes wâgu wac.

（三つの指の中に聖なる予言者は全能の神なるものを一つにして三つにひとしきことをかの神秘の力の秤にたとえられたことは確かなことである）

古サクソン語

Heliand (aus dem altsächsischen 《Heliand》)

2260f

thô bigan that folc undar im,

werod wundraian, endi suma mid iro wordun spſakun

（その時民衆はお互いに賛嘆の声をあげた，なかには自分の言葉で語ったものもあった）

古代ドイツ語

Tatian

102,2

phigboum habêta sum gipflanzôtan in sî nemo wingarten,

（誰かあるひとが自分のブトウ畑に無花果の木を植えておいた）

128,9

andero thioto sum farenti quam nah imo,

（ほかの民族（サマリヤ人）のあるものが旅の途次に彼に近寄って来た）

Otfrid I.17,3f

bî thiu thaz ih irdualta, thâr forna ni gizalta,

scal ih iz mit willen nu sumaz hiar irzellen.

（私が前に語ることをしなかったことについて，今ここで喜んで少しお話しましょう）

古英語の Genesis B (aus dem altenglischen Genesis B)

1033

mē tō aldorbanan

weorðeð wrāðra sum:

（敵のなかのあるものが私をころすことになる）

2572

þaet is wundra sum,

þara ðe gewohte wuldres aldor,

（それは神のなせる御業のひとつである）

Beowulf 1251

sigon þā tō slāēpe. Sum sāre angeald

aefen-raeste,

（彼らはそれから夜のねむりについた。あるものには夜の休寝が心苦しいものになった）

Beowulf 2156

sume worde hēt,

þaet ic his āerest ðē ēst gesaegde;

（彼は私が彼の遺贈(鎧甲の由来)を最初に伝えるように言葉すくなに命じました）

古アイスランド語

Edda から (aus der altisländischen 《Edda》)

Háv. 66

mikilisti snemma kom ec í marga staði,

enn til sið í suma;

ǫl var druccit, sumt var ǫlagat,

（多くの場所には早く来すぎた，しかしおくれて着いたところもある。麦酒が出されて飲んだ，いくらかの麦酒は(まだ十分）醸造されてはいなかった）

Fm.25

bróður minn hefir þú beniaðan,

oc veld ec þó sialfr sumo

（お前は私の兄から命を奪った，私自身にもいくぶん罪はある）

Br. pr.2

sumir segia sva, at þeir draepi hann inni í reccio sinni sofanda.

（なかには彼らが部屋で寝ている彼を殺したと言うものもいる）

上にあげた例文の示すように *sums*（英語の *some*）についてはその前に述べた疑問詞形不定代名詞とは使用される環境と条件の異なることを明瞭に読み取ることができるとおもう。すなわちこの *sums* の場合には，それの使用されている文が肯定的な環境におかれているという付帯的条件のなかで用いられるということである。古代ゲルマン語は古い時期にもっていた現代英語にみるような *some* と *any* の対語関係を語法の上からみるかぎりでは次第に希薄化させていく傾向がみとめられる[4]。例えば古代ドイツ語の《Tatian》には既に *sum* に代わって *sihwer* なる語の登場するのをみるのである。この点に関しては既に述べたが，念のためもう一例提示しておこう。

Tatian 121,4

thanne ir stantet zi betônne, forlâzet, oba ir sihwaz habet widar wen, thaz iuwar fater ther in himile ist forlâze iu iuwra sunta

（汝ら立って祈っているときに，もし汝らが誰かになにかふくむところがあるならば，天にまします父なる神が汝らの罪を許してくださらんことを念じて，その人を許してやれ）

この《Tatian》のところでは古い疑問詞形不定代名詞である *wer* の対格形の *wen* と新奇の不定代名詞 *sihwer* の中性対格形 *sihwaz* が併せて同時に使われており，このことは過渡期の様子を示しているものと考えられる。

もう一つここで *some* と *any* の対語の関係と間接的に関連する事柄について触れておく必要がある。それというのも *any* はときに *some* との対概念的な関連を離れて立つことがある。*some* との関連のなかにあるときは常に一定の限定条件，すなわち，*any* の立つ文が否定文，疑問文，あるいは条件文であるということが前提としてあった。ところが *any* はそのほかに，それが立つ文が肯定文であるということもあって，別段特別の環境にあるわけではなくても，この場合には意味機能の点ではむしろ *jeder*（現代英語では *any*）に近いものになる。この点に関して古代ゲルマン語の事情を探ってみることにする。まず古アイスランド語の場合をみてみるならば，ここでは，先の疑問詞が同じくそのままの形で *jeder* を意味している。

Edda から

Háv.36

halr er heima hverr;

（家では誰しも主である）

Hrbl.5

*þ*at segir *þ*ú nú, er hveriom *þ*iccir

mest at vita, at mín móðir dauð sé.

（お前はところで俺の母が死んだなんぞと誰にも知るに一番辛いことと思われることをぬかしおって）

このアイスランド語の *hverr* にたいしてゴート語は疑問詞の *hwas* にラテン語の *que*（現代ドイツ語 *und*）と同根の *-uh* を接尾辞（Suffix）を付けた *hwazuh* をもって表している。ここではゴート語が接尾辞でもって意味機能を補強している点を除けば，両者の間には殆ど差異はみとめられず，両者は英語の *any* の用法に合致するし，なおかつ疑問代名詞を使っていることに注目しておきたい。

ゴート語から

L.6,40

i*þ* gamanwids hwarizuh wair*þ*ai swa laisareis is

（しかし一人前の人は誰でも自分の師のようになれるであろう）

Mk.9,49

hwazuh auk funin saltada jah hwarjatob hunsle salta saltada

（誰しも火で塩味をつけられ，お供え物はなんでも塩で塩味をつけられる）

これに対して一方の西ゲルマン語の方の様子をみてみるに，ここでも疑問詞を核に据えていることには差異はないけれども，その疑問詞に接尾辞ではなく，接頭辞（Präfix）*ge-*を用いており，さらに古代ドイツ語ではそれに新たに *io/ia-* を付け足した形を創出している点が異なるけれども，造語の手法に関していうならば大同小異である。

古代ドイツ語から

Tatian 95,5

allero giweîih mit fiure wirdit gisalzen, inti eogilîh bluostar salza wirdit gisalzan.

（誰しもすべて火で塩味をつけられ，お供え物はそれぞれ塩で塩味をつけられる）

Isidor 17,21

sô sama sô auh araughit ist in isaies buohhum eochihweliihhes dhero heido sundric undarscheit

（同じくイザヤ書にも人々ひとりひとりを区別する個別の差異がはっきり示されている）

Tatian 110,3

thanne ist thir tiurida fora then thie mit thir samant sizzent, wanta eogilih ther sih arhefit wirdit giôdmôtigôt, inti ther sih giôdmotigôt wirdit ufarhaban

（かかるときには汝と席を同じくするものの前では汝には誉れがある。そのわけは自分自身を高くするものは蔑められ，己を低くするものは崇められるというものだ）

Otfrid I.27,49f

sô wer sô wilit manno, sô doufu ih inan gerno,

ouh iagilîchan wîhu

（人々のうちで望むものあらば誰でも喜んで洗礼を施し，誰といわずすべてのひとに神の恵みを祈らむ）

Otfrid V.4,57

iagilîh hiar sehan mag　　war ther lîchamo lag

（ここにいる人は誰でもその屍がどこにあったかを見てとることができる）

古サクソン語から

Heliand 2615ff

than weldi gerno gehwe wesan

allaro manno gehwilîc　　mênes tômig.

slîðero sacono.

（そのとき，すべての人おのおのはすすんで悪業を払い，邪な罪業はこれを避けることを心にのぞむであろう）

Heliand 1327f

mit them scal simbla gihwê

himilrîki gehalon,　　ef he it hebbien wili

（もし人誰しも望むことあらば，その人（キリスト）とともに永遠に天国を手にするであろう）

古英語から

Genesis B 641f

he *þ*ēoda gehwam

hefonrīce forgeaf, hālig drihten

（その人，聖なる主，はすべての人それぞれに天国を約束なさった）

Genesis B 545f

he maeg me of his hean rice

geofan mid goda gehwilcum,　　*þ*eah he his gingran ne sende

（かの人は弟子を使わしはなさらないけれども，御自分の天国から私に宝という宝をすべてくだしたまわることができる）

Beowulf 984f

foran āeghwylc waes.

steda naegla gehwylc　　stȳle gelīcost

（みんなのひとの前では打ちつけてある釘のひとつひとつが鋼にこよなく似ていた）

Beowulf 2890f

dēað bið sēlla

eorla gehwylcum　　*þ*onne edwīt-līf!

（高貴な強者（武士）どものいずれのものにとっても死は恥辱の人生よりはすぐれて貴いとされる）

以上のいずれの例文もすべて肯定文であるということ，ならびにここに現れる不定代名詞のほとんどがギリシャ語の *πᾶσ* かまたはラテン語の *omnis* の訳語であるか，時に *quisque*（Isidor）もしくはそれに相当する語として使われているなどのことは，これ以前のものとは異なる。しかし意味の上では現代ドイツ語の *jeder*，英語の *any* にむしろ通じるように思われる。ところが語の構成の面から見ると，またちがった側面のあることが目につく。ギリシャ語やラテン語とは異なり，特に西ゲルマンの言語では，ここにみるような不定代名詞はある種の疑問代名詞と接頭辞との合成からできている。そのときの接頭辞は上に挙げた例文

からもわかるように *ge-*, または *io/ia-* で，ともに『集合，団塊』ないしは『おしなべて』というような意味合いを基底語に付加するものであって[6]，この観点よりすれば，上で述べたゴート語の *hwazuh* と構造上には大きな違いはない。というのは Prefix と Suffix の相違はあるものの，その意味機能に関する限り相互に値は近い。ゴート語の Suffix は前にも述べたようにラテン語の *-que* と語根は同じであって，『加えて，さらに』等同類項的なものの寄せ集めを表す意味合いを具有していた。加えるに，ゴート語も西ゲルマンの言語もともに疑問詞にそれが付くという点でも共通する。しかし，いまここにみる疑問詞から派生した不定代名詞は元来は属格を伴う不定代名詞として用いられることが多かったが，それが数を表す語の多くの語に属格を伴う数名詞から数形容詞へと品詞の転換が起こったように，これらの不定代名詞もその性質と用法において似通うところがあるので代名詞から形容詞への転換がほとんど同時平行的に起こったものと思われる。なおこの不定代名詞も前のものと同様言語の歴史の過程で早期にほかの語と新陳代謝する運命にあった。疑問詞とその親縁語は意味の領域が狭く，それらからの派生にはかなりの抵抗を示すことなどは多くの言語の歴史に知るところであるが，これらのことは本稿の論旨からは外れるので，これ以上の論及はしないことにする。

(II)

前項の (I) では疑問詞および，それからの派生による不定代名詞が持つ意味と機能が，ある限られた前提条件のなかで不定代名詞としての機能を発揮することをいろいろの角度から考察してきた。次にこの項では前項で明らかになった疑問詞形不定代名詞の特性を念頭において，論題のなかの *swā* をめぐる問題を主眼に論述を先へ進めることにする。

この問題を考えるに当たって，先ずゴート語における *swā*～*swā* の構文の特徴を一応把捉しておき，その後で，ほかのゲルマン語のなかでも，とりわけ西ゲルマン語の領域に顕著にみられるこの *swā*～*swā* を使った慣用的な表現の成立ならびに特質といったものに説き及んでみようと思う。

ゴート語に認められる一つの大きな特徴は *swā* と *swā* の間に抱合される品詞としては，形容詞，副詞であって，それ以外の品詞が姿をみせることは皆無に等しいと言っても過言ではない。例えば，

ゴート語 から

R.11,13

swa lagga swe ik im *þ*iudo apaustaulus, andbahti mein mikilja,

（私は異邦人の使徒である間は，私の勤めをたたえる）

Mk.3,28

naiteinos swa managos swaswe wajamerjand;

（人の子が瀆すすべての冒瀆）

Mk.10,21

gagg, swa filu swe habais frabugei

（行って，汝らのもてるものをすべて賣り払え）

ゴート語では相関的に並んで立つ二つの *swā* のうち後の *swā* は *swē* という形で現れるが，このことについては後に触れることがあるので，詳しくはそのときに譲ることにして，上に述べた如く相関して並立する *swā* の間に抱合される語の品詞は殆ど形容詞か副詞に限られていると言ったが，その形容詞なり副詞はまた子細にみると更に細かな特性のあることがわかってくる。上のゴート語の例文が示すように，そこに現れる形容詞，副詞は数か量に関するもの，もしくは時間，空間の長さか幅を表すものにかぎられている。万一名詞が来ることがあっても，それは時間，空間を意味するものにかぎられている。例えば

Mk.2,19

swa lagga hweila swe miþ sis haband bruþtad ni magun fastan.

（彼らは花婿が一緒にいるうちは，断食することはできない）

ここにみるような構文上の特性から判断するならば，この背後には比較の構文があり，それが一つの支えになっていることは論を俟つまでもない。比較そのものに関しては，言語一般に共通の文法概念であるから，ことゴート語にかぎられるものではない。

古アイスランド語

Edda から

Rm.9

rauðo gulli (qvað Hreiðmarr) hugg ec mic ráða muno

sva lengi sem ec lifi;

（俺の生きている限りは赤い黄金は手放しはしないぞと，フレイズマルは言った）

Háv.12

era svá gott, sem gott qveða,

ǫl alda sona;

（人の子にはビールは人が言うほどによいものではない）

古代ドイツ語

Tatian 132,3

sô lango sô ih in mittilgarte bim, sô bim ih liohtmittilgartes.

（私が世にいる間は，私は世の光である）

Tatian 40,3

gibit imo sô manag sô her bitharf.

（彼の必要とするだけのものをあたえる）

Otfrid II.15,3f.

es mâru wort thô quamun sô wît sô Syri wârun,

sô wît sô Galilea bifiang;

（そのことに関する評判がシリヤにまでも，ガリラヤにまでたっするほど遠くとどいた）

Otfrid II.1,1f.

er allen woroltkreftin joh engilo gisceftin,

sô rûmo ouh sô in ahton man ni mag gidrahtôn;

（まだこの世の存在物と天使の生まれる前に，人が頭で考えることができないほど遠い昔）

古サクソン語

Heliand 343f.

sô wîdo sô is heritogon

obar al that landskepi liudio giweldun.

（彼の将軍たちがその民衆の全土を支配しているさいはてまで）

Heliand 1467f.

sô lango sô thu fiundskepies wiht,

wiðer oðran man inwid hugis.

（汝が他の人に敵意を，憎悪の念を抱いているうちは）

古英語

Beowulf 1223

efne swā sīde swā sāē bebūgeð,

（海の取り巻くかぎりの遠くまで）

上に挙げた例文を見てもわかるように，*swā* と *swā* の間にくるのは数と量または時間か空間の長さにかんする形容詞もしくは副詞であって，このことから判じて，これらが比較構文であることには疑問の余地はない。

なおここで一つ注目に値する事柄を指摘しておきたい。それはこの構文で二つの *swā* の間に数または量の表す形容詞または副詞がくるときに次にみるようなことが起こるということである。

ゴート語

J.10,8

allai swa managai swe qemun,[7]

（やってきたものはすべて）

Mk.3,10

swa managai swe habaidedun wundufnjos

（疾病を病むものはみな）

このような場合には現代語の

you may take as many as you want.

nimm soviel wie du willst.

にほぼ近い意味をもってくる。これらが比較構文であることを考えるならば別に不思議なことではないかもしれないが，因みにゴート語はこの箇処ではギリシャ語の πᾶσ の訳にあてている。このことは後に述べることとの比較の意味で多少の関連があるので言及しておきたい。

さらにもう一つ注目すべきは，なかでも副詞を中に挟む構文の多くが文頭に立つということから，これが慣用化され，次第に接続詞句へと機能と同時に品詞の転換が起こって，それが今にいたるまで引き継がれている。たとえば，英語では

as long as, *as far as*, *so long as*, *as often as*

ドイツ語では

solange, *soweit*, *soviel*, *sooft*

などの形で頻繁につかわれている。このことは論題の *swā* (*h*)*wer swā* の場合と大きく

異なる点である。

比喩も比較構文のひとつにかぞえることができるであろう。しかし比較構文が個々の具体における比較にとどまるのに対して，比喩の場合は単なる具体を越えたところ，言い換えるならばより普遍性の高い次元での表現であると言えるであろう。従って比喩の構文では比較の項が多く豊かな表現を求める傾きが強く，省略される部分が少なくなる。それが文の構造の面から言うと主文と副文の文章構造をとる形になる。この辺の模様を古代ゲルマン語の世界に探ってみるならば，ゴート語では比喩の対象として引き合いに出される方の文を導き出す導入語として *swāswē* が先ず文頭に立ち，いわゆる主文の文頭には *swā* がくる。この *swā* と *swā* の相関する構文には比較構文との類縁を窺うことができる。

J.13,15

swaswwe ik gatawida izeis, swa jus taujaiþ.

（私がなしたように汝らもなすように）

C.3,13

jabai hwas wiþra hwana habai fairina ; swaswe ; jah Xristus fragaf izwis, swa jah jus taujaiþ.

（もし誰かが誰かに対して非難すべきことがあならば，キリストが汝らを恕されたように，汝らも恕すように）

Mk.4,26f.

swa ist þiudangardi gudis, swaswe jabai manna.

wairpiþ fraiwa ana airþa. jah slepiþ jah urreisiþ naht jah daga .....

（もし人が大地に種を蒔き夜昼寝たりおきたりして.....すれば.....であるように，神の御國もそのようである）

このことを古代ドイツ語についてみてみるならば，

Tatian 133,12

sôsô mih mîn fater weiz, sô intcna ih mînan fater,

（私の父が私を知っているように，私は私の父がわかる）

Tatian 156,3

ih gab iu bilidi, sôsô ih iu teda, thaz ir sô tuot

（私の父が私を知っているように，私は私の父がわかる）

Otfrid IV.17,13f.

sôsô ein man sih scal werien　　joh hereron sînan nerien :

sô âht er io ginôto　　thero Kristes fîanto,

（ある人が自分の身を守って主人を救う（主人を守るために自分の身を大切に守る）ように，彼はキリストに敵対するものを激しく攻めた）

古代ドイツ語の *sôsô* と *sô* の相関はゴート語の *swāswe* と *swā* のそれに完全に対応することは明白である。なお更に古代ドイツ語では，その語順をみてみるに現代ドイツ語の副文，主文のそれぞれの語順と配列に一致している。ここで問題なのは副文の文頭に立って副文を導入している *swāswē* と *sôsô* の後半部に姿を現す *swē* と *sô* は一体どのような性質を持つものであるかということである。この点についても後程触れる機会があるので，その折にあらためて説明することにして，ここでは比喩の構文に使われる *swāswē* または *sôsô* を導入詞

にもつ文は通常主文とされる文よりは先に置かれること，および *swē* が比較構文では比較の対象となるものの直前にたつこと，例えば次に示すように，

ゴート語

Mk.9,3

hweitos swe snaiws, swaleikos swe wullareis ana airþai ni mag gahweitjan.

（雪のように白い，この世の晒し屋も白くすることができないほどに）

こうした点を考え合わせるならば，*swē* が *swā* の異形（Variante）であることは確認できる。また swe が後に置かれる文の文頭に立って比較の具体的な対象を例示する場合にも用いられる，

Otfrid I.16,23f.

thaz kind wuahs untar mannon sô lilia untar thornon;

sô bluama thâr in crûte

（その子は茨の茂みのなかに生える百合のように，雑草のなかに咲く花のように，人々の間で育つた）

比較及び比喩の構文に使われる *swā* についての考究はこれくらいにして，表題の問題の検討にはいることにするが，その前に二つ *swā* と *swā* の間に抱合される語が常に形容詞か副詞であることをここにあらためて念頭において，考察を次の項に移すことにする。

(III)

swā (*h*)*wer swā* の構文の成立をみるにいたる史的な要因やその背景について，以上の例証や論証を考慮にいれて，古いゲルマン語の資料を基に考証を進めることにする。その際以下においては同じ聖書の訳でも先ずは原典に忠実な直訳に近いとされる Wulfila のギリシャ語からのゴート語訳と，ラテン語からの古代ドイツ語 Tatian 訳をできうるかぎり比較対照じながら進めていきたいとおもっている。また場合によつては Otfrid の Evangelienbuch を参照していくつもりである。

はじめに現代ドイツ語の不定関係代名詞（現代英語の複合関係代名詞）に当たる語の使われている例文からみてみよう。ところで先にゴート語では現代ドイツ語の *irgendeiner* に当たる語に疑問代名詞 *hwas* がそのままの形で使われていることを知ったが，ここにみる不定代名詞の場合にも，その *hwas* に-*uh* という接尾辞[8] のついた語 *hwazuh* と関係代名詞 *saei* をつかってギリシャ語の *πᾶσ ὅστίσ* の，または *πᾶσ* ὅ+現在分詞の訳にあてている。だから *hwazuh saei* は現代ドイツ語の *jeder*, *der* に，そして英語の *any-one who* に相当するといってよい。

ゴート語

Mt.5,28

hwazuh saei saihwiþ qinon

（女を見るものは誰しも）

Tatian 28,1

iogiwelîh thie thar gisihit wîb

ゴート語

Mt.7,24

hwazuh nu saei hauseiþ waurda meina

（誰でも私の言葉を聞く者は）

Tatian 43,2

allero giwelîh thie thar thisu mînu wort gihôrit

Tatian 訳をみるとゴート語の *hwazuh saei*[9] にあたる部分がゴート語の *hwazuh* のように疑問詞との聯合を明確に想起させるようなものではなく，（*allero*）/（*io-*） *giwelîh* と疑問詞との関連がほとんど消失していて，単なる不定代名詞としてしか用いられることのない語を使っている。このことからも西のゲルマン語は前にも指摘したのと同様に，特にこのような不定代名詞に関しては，北や東のゲルマン語との間に大きな開きのあることが分かる。

またゴート語にはこの *hwazuh saei* と並んで，もう一つそれによく似た言い回しがある。それは *sahwazuh saei* という形で用いられるもので，これと前者との間の異同を調べてみると，

ゴート語

L. 7,23

audags ist sahwazuh saei ni gamarzjada in mis

（私に憤りを感じない人は誰でもその人は幸せである）

Tatian 64,3

ther ist sâlîg thie ni wirdit biswihhan in mir.

ゴート語

L.9,48

sahwazuh saei mik andnimiþ, andnimiþ þana sandjandan mik

（私を迎えてくれる人は誰でも私をつかわした人をむかえる）

L.9,48

sahwazuh saei andnimiþ þata barn ana namin meinamma, mik andnimiþ.

（私の名前においてこの子を迎える人は誰でも私をうけいれる）

Tatian 94,4

ther dar intfâhit einan luzilan in mînemo namen, mih intfâhit.

（私の名前において一人の子を迎えいれる人は私を迎えいれる）

ゴート語

J.15,7þatahwah þei wileiþ bidjiþ, jah wairþiþ izwis.

（欲しいと思うものをなんでも願うがよい，そうすれば，それば汝らのものになる）

Tatian 167,6

sô waz sô ir wollet bittet, inti wirdit iu.

このところではゴート語や Tatian の訳を見る限りでは前との違いは見えてこない。そこでこの箇処を原典にあたってみると前のとの違いが分かってくる。というのはこの *sahwazuh saei*[10] で訳されているところにはギリシヤ語の原典には ἐάν という konditional または konzessiv の文意を添える語が後続している場合の多いことに注目すべきである。Tatian が *sô*

waz sô で訳しているのにも，それなりの理由があるからである。その理由については本稿の中心テーマに関することであるので，ここではさし当たり不問にして後にまわすこととする。なお申し遅れたがラテン語の Vulgata にはギリシャ語の条件，譲歩の Partikel にかわって *quocumque* が使われていることにもそれなりの理由がある。

その辺の事情を物語る例文があるのでつぎに提示しておくならば，

ゴート語

J.6,51

jabai hwas matji*þ* *þ*is hlaibis, libai*þ* in ajukdu*þ* ;

（もし誰かこのパンを食べるものあらば，永遠の生をうける）

Tatian 82,10

sô wer sô izzit fon themo brôte, lebêt in êwidu,

この箇処のラテン語は

si quis manducaverit ex hoc pane, vivet in aeternum,

と条件文になっている。ギリシャ語，ゴート語それにラテン語までも条件文になってるのに，Tatian だけが *sô wer sô* の構文を使っている。このことはわれわれの問題を考える上で大きな示唆を与えるものとして注目しておきたい。

ゴート語にはこのような表現の仕方とならんで，もう一つ別の表現法があるので今度はそれをみてみることにしよう。

ゴート語

Mt.10,33*þ*ishwanoh saei afaiki*þ* mik in andwair*þ* ja manne, afaika jah ik ina in andwair*þ*ja attins meinis

（私を人の前で否認するものは誰であれ，私もその人を私の父の前で否認する）

Tatian 44,21

allero giwelîh thie mih bigihit fora mannun, thes bigihu ih fora mînemo fater

ゴート語

Mk.7,11

*þ*atei ist mai*þ*ms, *þ*ishwah *þ*atei us mis gabatnis ;

（私から与えられて役に立つものはなんでも，贈り物であるということ）

J.11,22

*þ*ishwah *þ*ei bidjis gu*þ*, gibi*þ* *þ*us gu*þ*.

（汝が神に願うことはなんでも，神は汝にお与えになる）

Tatian 135,12

sô welîhu sô thu bitis fon gote, gibit thir.

ここに挙げたゴート語からの例文のギリシャ語文にはすべてに条件的な意味合いを文意に添える Partikel の *ἐάν* か *ἄν* が文中に含まれている。そのことに関してはは，先程もすぐ上のところで述べたように，Tatian 訳にみられる *sô wer sô* の構文はゴート語やギリシャ語などとの比較対照から総合的に判断するに，条件と譲歩を交えたような意味合いを文意に付帯的に含ませようとする心理から生まれたもののように観ぜられる。それを誘起させる動因となったものは，どうも例の不定代名詞にあるように看取される。ゴート語の *pishwazuh*

にもそれらしきもの，すなわち条件なり，個を離れて相対的に多に及ぼうとする譲歩を思わせるようなものが語源的に潜んでいたのかもしれない。このことから推して考えるに，ゴート語の *hwazuh* をはじめとし *sahwazuh* にも，また Tatian に出てくる（*allero*）（*io -*）*giwelîh* はいわば事実関係（Realis）を，そしてもう一方の *pishwazuh* はそれに対して仮定（Irrealis）を前提として踏まえたものを表していたように思う。ところで *pishwazuh* の前半の *pis* 語源を訊ねてみると，この語は語形からも推測されるように，もともと指示（代名）詞 * *pa-* の中性属格形である。この属格形は古英語では *paes* であり，その用法には次のようなものがある。

（Altenglisch.）Genesis 832f.

nāere he firnum *þaes* dēop,

merestream *þaes* micel, *þ*aet his ō mīn mōd getweode,

（それ＝海と海の流れのためにいつか私の勇気が怯むほどに海が恐ろしくふかく，それほど海の流れが激しくはないであろう）

Beowulf 1366f.

nō *þaes* frōd leofað

gumena bearna, *þ*aet one grund wite;

（人の子にして誰ひとりこの深さを知るほどの知恵をもつものはいない）

古アイスランド語

（aus W. Baetkes Wörterbuch zur Altnordischen Prosaliteratur: unter dem Stichwort "*þ*ess"）

ekki var *þ*ess í lífi hennar er vándir menn hafa

（人々が逆境のなかで持つようなものはなに一つなかった）

（aus A. Heusler: Altisländisches Elemetarbuch. § 391）

þess betr *þ*ykke mér, er *þ*ú laster mik meir.

（お前が私を侮辱すればするほど，私にとっては，それだけ有利なように思える）

上例にみるような用例からもわかるように，この語の用法には現代ドイツ語の *so* または *von der Art* に通じるところがある。するとゴート語の *pishwazuh* は比較，比喩の表現のもつ相対化，ひいては一般化の要素を内に具有していたということになる。このようにみてくると，ここには Tatian の *sô wer sô* と一脈通じるものがあると推断するのもあながち無理ともいえない。従ってまたこのことから仮定的な意味合いが含まれていたことにもなる。ところで北ゲルマンのアイスランド語の方の様子を少し調べてみるならば，

Háv. 124

sifiom er *þ*á blandat, hverr er segia raeðr

einom allan hug;

（誰かひとに自分の心のうちを隠さずいえることができるならば，そのとき友情はふかまる）

Rm. 4

ósaðra orða, hverr er á annan lýgr,

of lengi leiða limar.

（誰か誠の心のない言葉で人をだますひとはその偽りの言葉ゆえに長く悩み苦しまなければならない）

ここにあげたアイスランド語の例文が示すように，北ゲルマンの言語の表現法は東のゴート語の場合と大体において同じ形式をとっている。たとえば両方とも疑問（代名）詞を用いてあらわしてる。このことは，われわれが（I）のところで見てきたごとく疑問（代名）詞が不定代名詞として用いられるときには，なんらかの条件が付帯的に作用する[11]。そうしたなかで疑問文とか否定文のような特殊な形式の文ではなしに，肯定の陳述文では（I）でみたように，ある一定の条件の下にあるものをすべて一括して包み込んで表出する意味機能がこの不定代名詞には生来具わっている。このことはまた一方見方をかえてみれば条件的な表現内容を潜在的に具有してもいることになる。この視点からみるならば北及び東ゲルマン語の語法はむしろ本来的なものを維持継承しているともいえる。それに対して西ゲルマン語では前にも触れたように，はやくこの形の不定代名詞を失ないつつあって，他のもので，彫塑性，造語性ならびに適応性の高いもので代償補充するようになった。ここに西ゲルマン語を北や東のゲルマン語から隔てる誘因のひとつがある。わけても西ゲルマン語のなかにあってドイツ語が *some* と *any* の対語表現を失なったことには注目しておく必要がある。ここに特筆すべきは西ゲルマン語のほとんどが，疑問代名詞形不定代名詞のもっていた *jeder* の語義と意味機能を喪失したことに表題の構文を生む要因の一つがあったように思われる。

(IV)

疑問詞形不定代名詞がもっていた語義の一部が失われて，そのうちの *irgendeiner* だけが残ることになって，これまでの条件を同じくするものを概括的，包括的に統べて表す不定代名詞のもっていた意味機能を問題の *sô* (*h*)*wer sô* が担う運びになる。こうした事態に至る史的展開の過程をたどりつつ，これまでの考察を念頭において，この構文の持つ特質を審らかにしたい。なおこの問題に関しては，これまでにも，いろいろの著作，論文などでも言及はされているけれども，ほかの問題との関連で問われていることが多い。そうしたなかにあって代表的な文法学者を挙げるならば，O. Behaghel と O. Erdmann, 最近の学者として D. Wunder の名があげられるであろうが，その学者たちの所説などについては随時紹介して，その都度，論評なり所見をのべることにして，とりあえずここでは名前を紹介するにとどめておく。

ここでも，しばらく聖書のゴート語訳と Tatian 訳とを対比校合しながらこの構文の特質をあきらかにする手がかりにしたい。

ゴート語

Mk.6,22

<u>þishwzuh þei</u> wileis, jah giba þus

（もし汝望むものがあるならばなんなりと，さしあげよう）

Tatian 79,5

<u>sô waz sô</u> thu bitis sô gibu ih thir,

ゴート語

J.15,7<u>þatahwah þei</u> wilei bidjiþ , jah wairþiþ izwis.

（もし汝ら望むものあらば願うがよい，すれば汝らに与えられる）

Tatian 167,6

sô waz sô ir wollet bittet, inti wirdit iu

既述の如くゴート語の *sahwazuh* にはギリシャ語の条件，譲歩の Partikel *ἐάν* またはその簡約形の *ἄν* が背後にあって仮定的な条件を文意に添えていること，及びラテン語の *quodcumque* に対応するように *sô waz sô* の表現形式で翻訳していると見るのは早計であろう。先ず何故ここに疑問代名詞が用いられているかを考えるに当たっては，これまでの論及からも推し量れるように，疑問詞を挟んでいる二つの *sô* の役割分担の問題の追究と解明が肝要であるとともに，不可避であるように思われる。そのような理由から，しばらく，この疑問詞を挟んでいる *swā*（＝*sô*）の問題から考察を試みることにする[12]。

D. Wunder (1965.S.410) が指摘しているように，この *sô wer sô* によって導入される副文 (Nebensatz) は大方の場合主文 (Hauptsatz) に先行する。もしもこれが O. Behaghel (III.S.291)[13] のいうように時及び仮定を表す接続詞 *sô* に導入される文と比較の文との交錯により生じた混交文 (Mischkonstruktion) であるとするならば，比較構文では (II) ところで説明した如く *sô* と *sô* の間には比較項目としての形容詞もしくは副詞が当然くるはずである。同じ Behaghel がまた別のところで (Syntax des Heliand.1966.§485) 説明しているように，時及び仮定の接続詞の *sô* をもつ文と *sulth*～*sô* との混交文であるとするならば，指示詞 (Demonstrativ) の *sô* が名詞にかかるということは古代ゲルマン語の時代にはみられないことである。もしかりにそのことが許されるとしても，比喩構文ならばとにかく問題はないにしても，比較構文の場合には，この *sô* が文頭にくるということには，かなりの抵抗があるはずである。従って Wunder の指摘するように，まずほとんどの場合 *sô wer sô* が文頭に立ち，しかも主文に先行するのである。このような特性は前に比喩を表す文章構造のところで提示したように *swāswē* ...., *swā*..の構文形式をとる。ここにみる *swāswē* は語の構造そのものが示す如く *swā* と *swē* の合成語である。これを分解すればそのまま *swā*～*swē* となるけれども，これは比較構文のものとはいささか性質を異にする。というのは，ここで問題にしている比喩の場合には接続詞としての *swā*～*swē* であって，主文にそれを anaphorisch に呼応して受けとめる *swa* が文頭にたつ。このような理由から推論すると，文頭に立つ *swāswē* に接続詞の機能をもたせているのは後に続く *swē* ではないのか。

Otfrid I.27,49

sô wer sō wilit manno, so doufeu ih inan gerno,

（人々の中で望むものあらば，わたしはその人によろこんで洗礼を施さむ）

Otfrid III.12,43f.

sô was sô thu es bizeines, in erdu hiar gimeines,

sô wesez al in himile,

（このことに関して，あなたがこの世でおとりきめになることは，天国においても，すべてそうあれかし）

Heliand 1957ff.

sô hue so iu than antfâhit thurh ferhtan hugi,

thurh mildean môd, sô habad mînan forð

willeon gewarhten

（汝らを篤信の心をもって，優しい心で迎える人は誰でも私の意志をまことにはたしたことになる）

このようにみてくると，*swaswē*....，*swē* と *sô wer sô*.....，*sô* の構文には相互に共通するもののあることが知られる。このことから *swē* は直前に隣接する *swā* を支える Partikel であると看做すことができる。さらにこの構文が Behaghel の言うような混交文から生まれたものであるとすれば，比較構文ではいまもなお *so* と *wie* や英語の *as*（または *so*）と *as* の呼応相関にみるように，その相応はかなり緊密であって簡単に崩れるものではない。それにひきかえて，*sô wer sô* のほうは既に古代西ゲルマン語の時代に崩れかけている。またこの *sô wer sô* が一体となって接続詞的な機能を帯びていたものなら，先にもみたように，英語の *as far as*，*so long as*，やまたドイツの *solange*，*soweit*，*soviel* などのように結びつきはかなり緊密であったはずである。もうひとつ反証となる資料は比較構文の *sô* と *sô* の間には先ず名詞のくることは稀であり，奇異なことでもあるということで，そのことは既に述べたが，更に疑問詞なり，不定代名詞が介入するというような事態は皆無にちかいのではないだろうか。ただし *sô wer* と　*sô* のあいだに *wer* に懸かる属格[14] のくることがある。

Otfrid I.24,17

sô wer manno sô sih buazit　　joh sunta sîno riuzit,

（人々のなかで贖罪をなすもの，また罪を悲しみ嘆くものはだれでも）

次に挙げるのは構文上の形式面からみるかぎりでは，問題にしているものと似てはいるけれども，*swā* と *swā* の間には関わりのない余分なものが介在している，

Beowulf 685ff.

ond si*þ*ðan wītig god

on swā hwae*þ*ere hond,　　hālig dryhten,

māerðo dēme,　　swa him gemet *þ*ince.

（賢き神，聖なる君は勇士の誉れを御自分にとってふさわしいとおもわれる，いずれの手にお与えになるかをお決めるになるでしょう）

ここには二つの *swā* の間に動詞すら入っていて，二つの *swā* の相関はかなり脆弱なものになっている。もう一つ問題になるのは，後の *swā* に続く文の動詞である。上例では *dēman* という動詞で，『承認する，認可する』を意味するが，このような動詞は Verba sentiendi（感覚動詞）もくは Verba dicendi（伝達動詞）とよばれ，このような動詞がくる場合には，構文形式そのものは似ていても，意味構造の面では同じになるとは限らず，むしろ隔たりがあるというべきである。なおこれら「感覚動詞」ならびに「知覚動詞」はならして Dativus commodi（便益の与格），Dativus sympatheticus（共感の与格），または Dativus ethicus（倫理の与格）といった与格を伴う場合がよくある。ここにもそれがみられる。

Beowulf 593f.

gif *þ*īn hige wāere,

sefa swā searo-grim,　　swā *þ*ū self talast;

（もしお前の気構えがお前自身が主張するように，それほどに闘争心旺盛であるならば）

Otfrid I.11,19

thô fuarun liuti thuruh nôt, sô ther keiser gibôt,
（そのとき人々は王の命じたように，ためらうことなく出かけた）

Otfrid I.10,5ff.
zi uns riht er horn heiles,.....
sôs er
.....was io giheizenti.
（あの方がすでに約束なさったように，あの方はわれわれのところに幸せの角笛を持ってきてくださる）

Beowulf 3055ff.
sealde *þ*ām ðe hē wolde
.....
efne swā hwylcum manna, swā him gemet ðūhte.
（その方（神）が自分にふさわしいと思われる，いずれかの方にお授けになるのでなければ）

まだこの最後の Beowulf の例文ではわれわれが問題にしている構文とはやや距離がある。動詞 *pyncan* はドイツ語の *dünken* とまったく同根同意の動詞で主意主観的な心情を表すものであって，比較比喩の構文に近く，むしろ同じ Beowulf からの引用例の，その上に挙げた例文に近いように思う。

問題の解釈にあたって synchronisch（共時的）の観点からするのと，diachronisch（通時的）な観点からするのとでは自ずと見解に相違のあることは研究者の態度に関わることでいたしかたないとしても，当面の問題に関する解釈でも，その起源や成立をめぐっては研究者のあいだにもいろいろ意見の相違がある。ところが意見の分かれるところは要するに二つの *sô* と，それらに抱合される *wer* の解釈に帰せられるが，まあそれも問題の性質上当然かもしれない。

O.Erdmann（Untersuchungen I.§96[15]）は前に置かれる *sô* を関係代名詞と看做し，例えば古代ドイツ語で指示代名詞 *ther* を関係代名詞の *ther* と区別する必要上関係代名詞の後ろに Partikel の *thar*, *ther*, *the* などを随伴させるが，これと同じように，前の *sô* を比較の *sô* との区別を表示するために後ろに *sô* をおいたことから両者が互いに相関しあって生まれたものとし，次の例文を引用している，

Otfrid I.24,17f.
sô wer manno sô sih buazit joh sunta sîno riuzit,
thaz thanne warlîcho duat: gihoufôt er mo manag guat;
（人々のなかで自らの罪滅ぼしをし，自らの罪を嘆き悲しみ，そのときまことの心もて，そのことをなすものは大いなる宝を山と積まむ）

この例文の中に使われている後の方の *sô* は後続の副詞または不定代名詞と一緒になって関係文を構成する役割を演じているとみなしている。がしかしそもそも *sô* が副詞を伴って関係詞の働きをするとみることには，かなりの無理があるように思う。ここで彼は二つの *sô* の間に副詞のくるような構文が，不定代名詞のようなものがくるのと同一構文とみなしているところに不都合な点があるように思える。要するに Erdmann[16] は *swā*～ *swā*（-*swē*）が共に関連し合って一個の関係代名詞の働きをしていると解している。ここで Erd-

mann の説に対してもう一つ異議を挟むならば，ここにみるところの *swā*～*swā* (*-swē*) が相関して関係代名詞の機能を果たしているとしても *swā* (*-swē*) ＝*sôsô* が関係代名詞として用いられている例は先ず殆どないといってよい。そのような事情のなかにあって，ときにつぎのような例があげられる，

Otfrid II.12,28

joh er mo iz al gisuazta　　sô wes sôsô er nan gruazta

（彼＝キリストがそのことについて彼＝ニコデムスに語ったことを彼＝キリストはニコデムスにとってよろこばしいことにした）

ここで後続の *sô* の重複形が問題の *sô wer sô* の構文に現れるのは Otfrid の場合には，このところのほかには，II. 19, 16に一度だけであり，しかもともにこの構文が Nachsatz（後置文）のときに限られている。このことは *sô wer sô* を文頭にもつ（副）文の多くが占める位置は前置文（Vordersatz）である。従って，ここにみるような後置文の位置にくることは極めて稀である。このことから推して，ここにくる *sô* には，ある程度の Nachdruck（強調）がおかれてしかるべきであろう。このような理由から，この *sô* の重複した形がここにみられるのである。こうした事情を考慮にいれるならば，

Otfrid I. 8,1

ther man theih noh ni sagêta,　　ther thaz wîb mahalta

（私がまだ話題にしたこともない人で，その女と夫婦の契りを交わした男）

ここにみるところの *ther* は用法の点で前の sô とは相違することは明瞭に窺える。

以上のことを総合して考えてみるならば，Erdmann の言うに，この *sô* を関係詞と速断するのは，まだどちらかといえば，根拠が薄弱で無理な点が多くあるように思える。例えば *sôsô* についてだけをみても，この語形はもともと *swāswē* と同根のものであって，これは上で述べた比喩の構文に当たる。そこでも述べたように，個別化の反対の相対化，さらには個から多へと延長拡大する普遍を意味する表現に道を拓く構文でもあったのではなかろうかと考える[17]。

また Erdmann (a.a.O.§94) は *sô wer*, *sô waz* は現代ドイツ語の *so einer*, *so etwas* のような表現形式が既に古代ドイツ語にもあって，慣用を通して結びつきを固めており，それからの類推から *sô wer*, *sô waz* が生まれ，副文の文頭に立つようになつたと説明しているけれども，ここでは Behaghel の言うように古代西ゲルマン語には *so* の Demonstrativ 的な用法はみとめられていない。もし *sô* が名詞に懸かるとすれば，次のように前の名詞または名詞句的なものを anaphorisch にうけることはあった[18]。

Otfrid III.14,82

allaz guat zi wâres sô flôz von imo thâre

（すべてあらゆる幸せ，そういうものがその人から流れ出た）

Otfrid V.4,32

in wîzes snêwen farawî　　sô was al sîn gigarawi.

（その方のお召し物は白い雪のように白かった）

また Braune, W./H. Eggers (Althochdeutsche Grammatik §293) も同様に不定代名詞に *sô* と *sô* がついて *sô wer sô* で関係代名詞の用をしていたという説明をしている。

古英語関係の文法学者は大体においてErdmannの説をとっている。例えばB.Mitchel (A Guide to Old English §164) やドイツの学者 K. Brunner (Altenglische Grammatik §345) が，これらに対してA.Campell (Old English Grammar §720) は疑問詞語幹 *hw-*に *swā*.. *swā* がついて関係代名詞になったとしている。

I.Dal (Kurze deutsche Syntax) は (§69) ゲルマン語では，本来ラテン語の *aliquis*, *quisquam*, *ullus* (現代英語の *some* と *any*) に対応する不定代名詞の区別を知っていたが，その区別は失われたとしている。そして不定代名詞の語幹に出自をもつ関係代名詞としてあつかってはいるが，その具体的な論旨については後程言及する機会があるのでその時にゆずることにする。大筋においては，R.P.AEbert (Historische Syntax des Deutschen) の説くところにちかい。Ebert (Seite 24f.) は西ゲルマン語に特有の不定関係代名詞の由来を相関する接続詞と疑問代名詞との結びつきから出たとし，それは付加語としては用いられることはなく，上位文の自立した文肢として機能したとしている。

最近の発表されたものとしては，D.Wunder (Der Nebensatz bei Otfrid 1965.) の説があるので，彼の所説 (Seite 409f.) を紹介しつつ筆者の結論にはいることにしたい。

まず彼はこの構文が一挙に普遍化，全般化の関係代名詞に成り上がったというものではなく，不特定性を表示する条件に叶うような人物 (Person) または物象 (Ding) が総括的，概括的にまたは概数的に関心事として意識にのぼり，それが話題となるような時にこのような表現がうまれるとし，こうした観点からみると，西ゲルマン語のなかにあっても特にドイツ語では，まだそのような表現の仕方は未発達であつた。そこで不定代名詞を含む条件的な構文によるよりほかなかった。だからいまに言うところの譲歩文の域にはほど遠いものであって，『そのたぐいのものはおしなべて』と言うまでにはしばらく時間を要した。こうした事情を酌量するならば，不特定な概数表現のなかから二次的に生まれ出てきたものであろうとしている。

さらに説明を続けてWunderはいう，この構文の特性についてみるに，上位文と下位文を合わせて一つの文章に組み立てるときに，同一人物，同一事物が双方の文にまたがって同時に相関連していると，双方に相関的な関係が自然発生的にうまれてくる。その理由として（次のような二つの理由をあげている。

一つには副文に主文（上位文）が後続するような時に，副文の不定代名詞がまた主文のなかでも，それを指す人物，事物が代名詞または，その類のものによって表されるというようなときには，主文は副文の不定代名詞についての仮定的結果か，または必然的な結果を敷衍し陳述するということになる。

もう一つは副文中の不定代名詞によって表されるものが副文を導入する語と融合するとき，例えば *sô wer/sô waz* (*-sô*) のようなときには，主文中の代名詞はおのずと副文導入詞と融合した不定代名詞と密接不可分の関係におかれる。Wunderはさらに説明をつづけて，Otfridでは主文と副文の相関関係 (Korrelation) が明白な場合には副文は一種の関係文に似た形で主文につながる結果副文は主文の一文肢として位置づけられることになると解説している。しかしむしろこうした構文の嚆矢の役をなし，先駆となったものは主文にKorrelat (相関詞) を持たない次に示すような構文ではなかったかと思われるのである。

Otfrid II.12,69f.

sô wer sô thes biginne　　thaz tharazua githinge,
sih niotô frâwes muates　　joh êwiniges guates.

（そちらの方（人の子＝キリスト）に心を向ける人なら誰でも晴れてよろこばしき心と，いつまでも変わることのない幸せを享受できまするように）

Isidor 38,4

dhiz susliihhe sô hwer sô wanit dhazs izs in salomone wâri al arfullit, filu aboho firstandit.

（このようなことはSalomonという所でならば，すべてが滞りなく満たされるであろうと信じる人がもしあるならば，（その人は）思い違いをしている）

（Altsächsisch.）Genesis 68

sô hwat sô mi an thisun
wega findit,
aslehit mi bî thesun sundeun.

（道中で私と出会う人がもしあれば，この罪ゆえに私を殺害するであろう）

Heliand 1957f.

sô hue sô iu than antfâhit　　thurh fehtan hugi,
thurh mildean môd,　　so habad mînan forð
willeon gewarhten

（信心篤き心，優しき心もて汝らを迎える人もしあらば，私の心を本当に実行に移した人である）

これらの例文では主文に副文の不定代名詞を受けるanaphorischな代名詞またはそれに類するものはおかれてはいない。筆者はこうした主文の方に副文に現れる不定代名詞を受けるようなもののない構文の方が成立の過程から言うならば先行するのではないかと思う。何故かといえば，その理由は本稿の冒頭のところで既に例証したように疑問詞形不定代名詞は本来その起源から一定の条件に該当するものを概数的に統合して指示する意味機能を担っていたということにある。

不定代名詞がある一定の条件のもとにおかれるものを概括して表示するための条件づけをするのがここにいうところの仮りに副文とされるものである。従ってこの不定代名詞はそもそもの誕生から現代ドイツ語の *jeder*, *der*....の意味機能を内包していたものと考えられるのである。その証拠にいまでもドイツ語ではこうした不定関係代名詞の文章では，一方の主文とされる方の文にそれを受ける代名詞の現れないのが一般で，格（Kasus）が異なる時に限り，主文の方にそれが姿を現す。このことにも根拠となる理由はここに見るのと，すべてではないにしても同類のものを窺うことができるように思う。

古代ゲルマン語においても格の異なる場合には，そこに必要な格形をもった代名詞がおかれていることは論を俟つまでもない。われわれはここに，すなわち格の異なる時に主文とされる文に該当する格を持った代名詞が現れるところに，いわゆる関係代名詞化への足掛かりとなる第一歩が踏み出されるものとみることができる。格の一致がない例は既にこれまでの引用例にもしばしば見られたから，ただここでは念のために一つあげておこう，

Otfrid III. 14, 79f.

sô wer sô thes ruahta　　thaz fruma zi imo suahta.....:

es ni brast imo thâr;

（その方のおそばにいて幸せを得ようと努めた人なら誰であれ，その幸せに恵まれない人はなかった）

ここで，しばらく論考を一旦前にもどして，*sô wer sô* の構文が条件文的な成因を背負って生まれてきたことはこれまでの論述から明らかになったと思うが，今一つ，その辺の事情を傍証する例文を 引用しておこうと思う。

Tatian 82, 10

sô wer sô izit fon thesemo brôte, lebêt in êwidu

（誰かこのパンを食べるものがあれば，その人は永遠の生をうく）

この Tatian 訳の原本であるラテン語は

si quis manducaverit ex hoc pane, vivet in aeternum

となっており，条件文であらわされている。またゴート語もギリシャ語の方も同様に条件文を使って言い表されている。

ゴート語

J.6,51

jabai hwas matjiþ þis hlaibis, libaiþ in ajukduþ ;

Tatian の訳でも原文が条件文でない場合には，かならず通常の関係文を使っていて，完全にラテン語の原文と一致した訳文になっている。

Tatian 82, 11

ther thar izzit thiz brôt, lebêt zi êwidu

（このパンを食べるものは永遠に生きる）

この部分のラテン語は

qui manducat hunc panem, vivet in aeternum

例文に見るように，Tatian 訳と語順をも含めて完全に一致している。論旨の都合上 Otfrid からさらに一つの例文をあげておこう。

Otfrid III. 16, 15f.

sô wer sô wolle thenken, then gotes wilon wirken,

joh huggen io thurh nôt thaz er selbo gibôt:

yrkenn er thesa lêra joh sehe tharana in wâra:

（神の御意を遂行しようと志すものは誰であれ，また神のお指図を固く心に念うものは誰であれ，この教えをしかと弁え，かつ心から理解するように）

この箇所にあたるラテン語は次のようになっている，

si quis volverit voluntatem eius facere, cognoscet de doctria,

やはりここでも，ラテン語の条件文に対して *sô wer sô* の構文が使われている。以上の二つの例文は取りも直さず，*sô wer sô* の構文が条件に加えて，譲歩の意味合いを内包し，含意していたことを暗に物語っているものとみる。念には念をというわけではないけれども Otfrid からの引用の箇所を因みに Tatian の訳から拾ってみると，次のようになっている，

Tatian 104,5

oba wer wili sînan willon tuon, vorstentit von lêru,

これなどはラテン語からの直訳ではあるけれども，上の Otfrid のものと対比してみれば，Tatian の *oba wer* と Otfrid の *sô wer sô* とのそれぞれ表現の間には，いわゆる紙一重の差しかないことがより一層はっきりしてくるように思う[19]。

Otfrid はさらに，当面の問題を考えるにあたって，これまでとは別の意味で解決への端緒ともとれる興味深い証拠となるような例文をわれわれに提供してくれている，

Otfrid III.17,39f.

sô wer ..... untar iu sî, thaz er suntilôser sî,

ther werfe ..... in sia then eriston stein.

（もし汝らのうちに自分は罪のないものであるというものがいるなら，その人は海に最初の石をなげてよい）

この例文がわれわれに提供してくれる問題解決の方向へのヒントというのは，文頭の *sô wer* がそれである。ここにはこれまでのものとは違って，*sô* が *wer* の前にだけあって，後ろにはおかれていない。まず文意から考えるならば，ここはどうしても，「もし誰か自分は罪がないとするものがお前達のなかにあるなら」ととりたい。そのとき thaz が問題になるが，いまのところは一応関係代名詞と解しておくことにする。というのは，

Otfrid III.18,3

wer ist,.....hiar untar iu thaz mih ginenne zi thiu

.....?

（汝らのうちに私を罪あるものとはっきりいえるものがあるか）

ここにも出てくるが，ここでは *thaz* は間違いなく疑問代名詞 *wer* にかかる関係代名詞である。このように関係代名詞が不定代名詞にかかるときには関係代名詞は中性の関係代名詞でうけるのがむしろ一般である。この例文から推察するに，ここにみる *thaz* はともに疑問代名詞もしくは不定代名詞 *wer* にかかる関係代名詞と受け取ってよい[20]。そのことから導き出される結論としては，前の Otfrid の III.17,39の *wer* は不定代名詞ということになる。そういうことになると問題はその前の *sô* に移ってくる。この *sô* に関しては上のところでみたように大抵の文法学者は解釈や説明には多少のニュアンスのちがいはあるにしても，たとえばなかには *sô wer* または *sô wer sô* 全体を関係代名詞とする学者もいるけれども，それはある歴史的時間の経過するなかで結果的にはそういうことになるのだが，大筋においては条件文を導入する接続詞的なものとする方向では意見は一致している。しかし，ここでひとつ付け加えておかねばならないことがある。それはこれまでも繰り返しのべ，強調してきたことでもあるが，問題の構文では条件と同時に併せて譲歩の意味機能を初めに指標したのは不定代名詞のほうであった。がしかしそれも透かし絵のように語義に潜在的に付着していた，その隠れた語義を前面に滲み出すと同時に併せて接続詞の機能をもって登場したものとみる。それではその後に続く *sô* の素性と，それに負荷されていた機能の究明が問題としてのこる[21]。

Behaghel をはじめ Erdmann もまたそのほかの研究者にとってもこの後におかれた *sô* の扱いはかなり難問であるらしく，この問題を究明する際の興味と関心は殆どこの *sô* の解明に向けられているとみるのも強ち過言ではないであろう。従って意見の分かれるのも多くはこの *sô* の品詞をめぐる問題に集約できる[22]。例えば，一つにはその起源を比較構文に求

めるか，あるいは関係代名詞の構文の延長にその淵源を遡らせるかによって解釈に開きのあることは先に Behaghel と Erdmann にみられるところであり，かつまた *sô wer sô* をまとめて一つの関係代名詞とみる説もある。

このようにいろいろな見方や所説のあるなかで，D. Wunder が彼の著作（Nebensatz bei Otfrid 1965 Heidelberg）のなかでこの問題についてかなり詳しく論じている。その著作のなかで彼は次のように説明したうえで自分の見解をのべている。そこで彼は Otfrid のなかから次の例文をあげて

(Seite 120)

Otfrid IV.21,33

sô wer sô ist fona wâre,　　ther hôrit mir io sâre;

（誠より出で来る者はすべて私の言葉に耳をかたむける）

Wunder はこれに現代ドイツ語訳を加えた上で，以下のように説明している。

> Ursprünglich kann der Satz gelautet haben: 'so ist (nun) irgendjemand aus der Wahrheit. Der hört mich.....' wobei *so* (s. kond. *so*-Sätze) auf einen vorhergehenden Kontext verwies; der 2.HS (=Hauptsatz) stellt sich als Folge des ersten dar, der in diesen und ähnlichen Fällen bedingend wirkt. Wird nun dieser bedingende Satz dem zweiten als Bedingung untergeordnet, so erfährt die Satzeinleitung *so* eine Umdeutung, die konditionle Beziehung beider Sätze überträgt sich auf sie. Das pronominale Subjekt tritt an die zweite Stelle, das Vf. (=Verbum finitum) an die letzte Stelle im NS. (=Nebensatz):'so irgendjemand aus der wahrheit ist'. Der Bedeutung nach entspricht dieser Satz schon dem ahd.(=althochdeutschen) *so wer so*-Satz; aber es fehlt noch das zweite *so*. Eine eindeutige und einleuchtende Erklärung für dieses zweite *so* erscheint mir nicht möglich.
>
> この文章はそもそもその起源においては次のような内容のものであったであろう：「さてところで誰かある人が真実の生まれの人であるとする。その人は私の言うことに耳をかたむける.....」こういう場合には *so* は（条件を表す *so* の文の箇処を参照）顧みてこの文に先行する文脈に倚り懸かり，そちらの方を照応指差していた。この文の後に続く主文はこのような場合に，またこれと似たような場合に，後続する主文に対して，ある種の条件を付与する関係で，先行する文（副文）の内容から起こりうる結果を表すことになる。ところでこの論理的には条件を表す文（副文）が二番目の文（主文）に従属するような形になると，文導入の *so* はこれまで担っていた機能の分担を変えて，二つの文を条件と結果の関係によって結ぶ方向へ大きく機能転換するということになる。そのとき主語の代名詞（筆者の言う不定代名詞）は第二番目の位置に立つことになり，定動詞はその文（副文）の最後にくることになる:従ってこの文の語順は"so irgendjemand aus der Wahrheit ist" という配列になる。意味の上からはこの文はこれで古代ドイツ語の *so wer so* の文に対応してはいるけれども，まだこの段階では後にくる *so* の登場の余地がない。この二番目の後に置かれる *so* を明解かつ鮮明に説明することは私の力に余ることのように思われる）

とこのように説明し，最後には，後にくる *sô* の件については半ば匙を投げた形で，一応の彼なりの決着をつけてはいるが，Wunder の見解には大筋においては賛意というか，かなりのところまでは同調したいところではあるが，なお細部については賛同しかねる面がある。以下最終的にこれまでの研究者のうちから主だった人の所説を検討し，照らし合わせながら

筆者の研究の結果を結論づけておこうと思う。

まずは *wer* についてであるが，このことについては本稿の前半のところで，かなり多くの例文を列挙して細部にわたって詳しい説明をしてきたので，ここでは，これまでの説明では意を尽くし得なかった部分について触れておくことにする。これまでの例証と論述からも明らかなように，古くは疑問詞がそのままの形で不定代名詞として用いられてはいたが，その後言語の歴史のなかで西ゲルマン語の疑問詞はその機能の一部を失った。その結果残ったのは *irgendeiner*（誰かあるひと）の意味のみであって，これまで持ち合わせた *jeder* の意味機能をほかの言葉で埋め合わせる必要にせまられた。そのかたわらこれまで疑問形不定代名詞の持っていた意味の *jeder* では満たされないところの条件および譲歩の微妙なニュアンスを添えることによって，その欠落部分を埋めようとして案出されたのがここにみる *sô wer sô* の構文による表現であった。このことについて中世ドイツ語文法学者である Schröbler は彼の文法書のなかで次のように述べている。

> Schröbler (Paul/Moser/Schröbler/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik 1982 Tübingen §282 Anm.1)
>
> Indefinite Bedeutung von *wer*, *waz*, *welch* findet sich im Mhd. nicht mehr (während sie im Ahd. in beschränktem Umfang vorhanden war)

と古代ドイツ語では限定された範囲でのみ使われていたが，中世ドイツ語では *wer*, *waz*, *welch* などからは不定代名詞の意味機能くは消えてなくなっていると言っていることからも確認できる。

このようなことから考えると，この構文には元来条件，譲歩の意味を下地に包有していたと言うことができる。しかしその隠れた内面の機能をより明確なものとして前面に押し出すのに力をかす働きをしたのが，このふたつの *sô* のうちの先行の *sô* であったとするのがより真相に近いようにおもう。なおつけ加えて言うならば，*sô* という語はもともと意味の領域が広く，融通性というか応用範囲の広い語であり，品詞としても指示詞，副詞，接続詞的な要素を併せ持つ用途の多い言葉である。さらにいうならば，前後の文脈への依存度の高い語でもあるといえる。例えば接続詞の用法にかぎってみても temporal, konditional, konzessiv, relativ などなどと柔軟性の豊かなところがみとめられる。

ここで最後に残された後に続く懸案の *sô* について考えてみることにしよう。

I. Dal が *sô wer sô* を本稿にいうところの疑問詞形不定代名詞に起源をもつ関係代名詞であるとしたことについては先のところで触れてはおいたけれども，そこでは具体的に言及することは差し控えたけれども，いまここで，その点についての説明を加えておこうと思う。ところで Dal はその説明のなかで，この *sô wer* に後続するもう一方の *sô* については次のように述べている。(Kurze deutsche Syn-tax §143)

> Der Ausgangspunkt für das spatere Eindringen der p Interrogativa (Indefinita) in relative Funktion sind die Verbindungen ahd. *so (h)wer so; so (h)welih so; so (h) wedar so; und* mit Adverbien *so (h)war so* usw., die als unbestimmte und verallgemeinernde Relativa fungierten; das zweite *so* diente als Einleitungswort des Nebensatzes. Im Mhd. verschmelzen die Verbindungen zu *swer*, *swelch*, *swa*, *swar*, *swamme*, *swie* usw.

要するに，Dal はこの後続する方の *sô* については副文を導入するためのものとみなしている。もしかりに副文を導入するものであるとするならば，前におかれる *sô* はどのような機能を負うものなのか。なお，これを接続詞的なものであるとするならば，それに負荷されたところの意味機能はいったいいかなるものであったのかなどのことについて，またさらに論者のいう不定で全般化の機能をどのような変化の過程を経てもつようになったのかの点に関しては，いろいろと疑問が残る。また接続詞的な機能をもっているとするならば，そこにおける主語のようなものはどうのようにして発現されるのかも不明である。このように考えると論者はこの *sô* を Erdmann のいう関係代名詞にも，また一方では Behaghel のいう比較構文のものとも受け取っているようで曖昧性は拭いきれない。*sô wer sô* が一体となって古代ドイツ語の終期には，すでにほとんど現代の不定関係代名詞に近いものになっていたことは確実である。このようにみてくると，残念ながら Dal の説明にも起源に関する問題と，その後のいわゆる関係代名詞とみなされるに至ったものとの間にあるものとが交錯して扱われているように解釈される節が多分にあるように思われる。

sô の用法のなかで統語論的機能の面からみて konditinal なものに近いところの temporal な用法からみてみよう。

古代ドイツ語

Isidor 29,16

sô ir dhuo ubarmuodic endi unchilaubendi noh dhea selbun êwa ni wereda:
Dhuo azs iungist bidhiu quham gotes sunu

（その人が高慢に，そしてまた不信の念をいだいてその掟をまもらなかったとき，そのときたまりかねてついに神の子が姿をみせた）

Tatian 19,6

sô her thô bilan zi sprehhanne, thô quad her zi Simone;

（彼が話し終えたとき，そのときに彼は Simon にかたりかけた）

Otfrid I.22,7f.

sô sie thô thar gibetôtun, thie fira gientôtun,
sô iltun sie heim sâr, drof ni dualêtun thâr.

（彼らはそこでお祈りをすませ，お祭の時が終った時，すぐに急いで家路につき，そこにためらってはいなかった）

Otfrid III.23,25f.

sô druhtîn thô gihôrta thaz er sô zorkôlota,
thô inthabêt er sih sâr giwisso zwêne daga thâr.

（主は彼＝ご自分の友達が病気であることを耳にされたとき，たしかそこに二日の間ご滞在になられた）

Heliand 3707ff. :

sô thô that barn godes
innan Hiersalem mid thiu gumono folcu,
sêg mid thiu gesiðu, thô warð thar allaro sango mêst

（神のみ子が人々の群がれいるイエルサレムにその一人のお仲間のものをつれてお着きになったとき，もっとも声高き歌声が上がった）

Heliand 984f.

sô he thô that land ofstôp,

sô anthlidun thô himiles dôru,

（彼がその地に入ったとき，天国の扉が開いた）

多義的（vieldeutig）であり，かつ多様な機能をもつ *sô* がここに挙げた例文では temporal に関する接続詞として機能していることを指標するのは，これに続くところの *thô* しかない。この *thô* は副詞としては，ただ時間関係を表示するものであって，それ以外の関係を表すことは恐らく，というよりも滅多にないとみてよいであろう。もし仮にあったとしても例外中の例外とみなしうる。従ってここで *sô* の持つ多様な用法のなかから，それが temporal であることを明示するものは *thô* であるとも言いうる。勿論そのことは絶対的な条件ではなく，Kontext からそれと判断または推定可能な場合には省略されることもある。

Tatian 82,3

sô thô gisah thiu menigi thaz ther heilant thâr ni was noh sîne iungiron, stigun in skef inti quâmun p zi Capharnaum suohhente then heilant. Inti sô sie inan fundun ubar sêo, quâdun imo: meistar, wanne quâmi thu hera

（群衆は救世主キリストと彼の弟子たちがそこにいないということを知ったとき，救世主を探しに舟に乗ってカペナウムへいった。彼らが湖の向こう岸に救世主を見つけたとき，彼らは彼に「主よ，いつここにおいでになったのですか」と尋ねた）

Otfrid IV.9,17f.

sô sie girihtun allaz thaz joh er zi muase gisaz:

gibôt er thaz sie sâzîn,

（彼らがそれをすべてすっかりととのえて（食事の支度をすませて）彼キリストが食卓についたとき，彼は彼ら弟子たちに食事につくようにとおいいつけになった）

これらの例文では問題の *sô* が時を表していることは文脈から分明であるので *thô* による側面からの助けを必要としない。この時間関係を表す接続詞としての *sô* が *thô* とともにつかわれているときに，この両者の間に挟まれる語の品詞に注目してほしい。そこにくる語は，上例が示すごとくほとんど常に名詞であり，そのなかにあって特に代名詞のくるのが圧倒的多数である。このような特性はそのまま *sô wer sô* の場合にもいいうることではなかろうか，というのはこの *sô* と *sô* の間にくるものも，すでに上のころで見たように不定代名詞が基本で，そのほかにはそれにかかるところの属格の名詞であった。さらに加えて先頭の *sô* が接続詞であるということはすでに述べた。そのことに着目して，いまこのことを中に挟まれた不定代名詞に内在する条件的な意義要素を引き出して考え合わせるならば，*sô* のもっている多用な意味機能のなかから条件および譲歩を表すことを明示するには，当面最初はなにか支えとなるものの必要が感じられたのでないだろうか。そのようなときにその必要を満たすとともに，その Polyvalenz（Mehrdeutigkeit）（多義性）を排除して論理的な明確性（Eindeutigkeit）をもたせるのに資したのが *sô* ではなかったか。しかも，この後におかれた *sô* は先に比較，比喩構文のところで使われていたゴート語の例の *swē* と来源を同じくする語である。そこでも説明したように，この語は単独で用いられることは至って稀であって，殆ど *swā*(=*sô*) とともに，しかもそれに後続して用いられるところの，いわゆる共義的（*synseman-tisch*）な性質をもった語であったことはすでにそのところでも触れておいたこ

とでもある。*so*～*thô* の構文と *sô wer sô* の構文と2の類縁性を示す例文を念のためにあげておくと，

Tatian 30,5

sô waz sô ubar thaz ist, sô ist iz fon ubile.

（もしもこれ以上のものがあるならば，それは悪からでたものである）

Otfrid I.27,49

sô wer sô wilit manno, sô doufu ih inan gerno,

（もし人々のうちで希望するものがあれば，私はよろこんでその人に洗礼をほどこす）

Heliand 1957ff.

sô hwe sô iu than antfâhit thurh ferhtan hugi,

thurh mildean môd, sô habad minan forð

willeon gewarhten

（もし誰かそのとき信心深い心をもつて汝らを迎えてくれる人があるならば，ためらうことなく私の意志を実行したことになる）

これらの例文には前の *sô*～*thô* ....., *thô* の構文とのほとんど完全にちかい整合がみとめられる。このような事実に照らしてみても二つの構文の成立の基礎には論理的にも，また心理的にも命脈を通わせるもののあることを窺わせるに十分な証拠といえるのではないだろうか。今この二つの構文に共通する部分を簡略化してしめすならば，

sô-代名詞（または名詞）-*thô*.....,*thô*.....

sô-不定代名詞-sô.....,*sô*.....

ということになって，両方の構文の間にほぼ完全な符合のあることを知るのである。

そのほかにも両構文の類縁性をしめす共通した特性がみられる。それは *sô* が文脈から接続詞としては temporal な関係を表示していることが明白であるときには省略されることをみたが，この場合にも同じく後におかれる *sô*（＜＊ *swē*）の省略されることである。ここにもこれら二つの構文の成立の間には論理的に通有するところのあることが知られる。

Tatian 82,10

hier ist leib fon himile nidarstigantêr, thaz sô wer fon themo selben ezze, ni sterbe.;

（ここに天より降ってきたパンがある，自らすすんでこれをもし食するものがあれば，死ぬということをなからしめむ）

Otfrid V.11,11f.

sô wemo ir ....giheizet, ir sunta mo bilâzet—

giwisso wizît âna wân, ist mîna halbun sâr gidân

（もし汝らが誰かにその人の罪を許してやることを約束するならば，私の方からもただちにそうなされる）

最後にこの構文が古代ドイツ語から中世ドイツ語へと時代が移るなかで，慣用を通じて次第に成句化していき，ついには関係代名詞となる方向に向かって一気に速度を増すことになる。その過程で，もともと *sô* の補助的な機能しか果たしていなかったところの後に置かれた *sô*＜＊ *swē* は全くその論理的機能を喪失し，消滅する運命におかれた。そして *sô* も *thô* も共に任務を果たし終えたとき身を引いていくことでも似通っている。

ただし中世ドイツ語の時代にはいっても微かにその余喘をたもっていて，まことに稀ながらも時にその薄い影を垣間みせることがある。

Tristan. 4583ff.

swaz sô daz ros und ouch den man

ze rittere geprüeven kan,

der geziuc was aller sêre rîch

（馬と人を騎士であると証してみせることのできることといったらそれは，その武装がすべて立派であって.....）

それはまた中世ドイツ語では *wenn jemand*（もしだれかが）というような条件を表す副文を導入する構文に代わって用いられるが，そのことも由来を質せば，ここにその遥かな淵源を求めることができるのではないだろうか。

Iwein 202f.

swer iuch mit lere bestat,

deist ein verlorniu arbeit

（もし誰かあなたに教えて聞かせる人があるならば，それは無駄な骨折りというものだろう）

なおさらに中世ドイツ語の文献資料のなかには次のような例文もみられる。Minnesinger: Manessische Sammlung von Friedrich Heinrich von der Hagen II,230 a.

er getuot es niemer mer; dar an gedenke, swer sô der welle.

（誰が望もうとも，彼はもう二度とそのようなことはいたすまい，そのことはしかと覚えおけ）

これを以下に提示する Parzival からの用例と対比して，その間の推移を考えるならば，

Parzival 99,16

den trage und nem nû swer der wil.

（欲しいと思うものは誰でもそれ（勇士の印である錨）をとって持って行け）

Parzival の例文では *swer* が既に関係代名詞として用いられているのに対して，一方の前の Minnesinger ではまだ不定代名詞から関係代名詞へ移行する過度的な段階にある現象を反映しているものとみなすことができるのではないであろうか。その理由として，Minnesinger にはいまだに古い言い回しに属する *sô* を温存し，また同時に *swer* の関係代名詞化を予兆する Partikel の *der*（古英語 *pe*，古サクソン語 *the*）による裏打ちがみられることがあげられる。このような史的経過を辿りつつ *swer* の関係代名詞化は進展していったものと推し量ることができる。

ところで話が中世ドイツ語に及んだついでに，中世英語についても本稿にこれまで述べてきた論旨に確かな証拠をたえてくれるような論文のあることを知り，手にいれることができたので参考までに紹介しておく。それはフィンランドのヘルシンキからでている学術研究誌に載った論文で，この筆者ならびに論文のタイトルは

Kirsti Kivimaa: The Pleonastic That in Relative and Interrogative Constructions in Chaucer's Verse (Commentationes Humanarum Literarum Societas Scientiarum Fennica Vol.39 Nr.3. 1966 Helsinki-Helsingfors)

K.Kivimaa がこの論文の冒頭で説明しているところによると，中世英語で「冗語」とい

われている *that* にはこれまで中世英語の Syn-tax の研究者はあまり注意を払ってはこなかった。現代の学者達はｐこの「冗語」の *that* を文法の観点からはなんらの史的証拠（justification）もなしに関係代名詞や疑問詞（relative and interrogative expressions（pronouns and adverbs）にそえられたものと解している。しかし，ここにみるところの中世英語の *that* は単なる「冗語」ではなく，古代英語の時代の Partikel である *þe* または *þ*aet と考案と用法において相共通するものであり，英語の史的発展の過程における一連の現象の一齣であるとみる方がむしろ歴史的にも当をえているように思う。そして *who that*（*anyone who*），や *where that*（*wherever*）のような総括化，全般化の表現にみる *that* もまた pleonastic（「冗語」）とは考えられない。結論として（P.30）この関係詞の構文に共起するところの，これまではとかく「冗語」的なものとされてきた *that* は疑問詞との共起よりもはるかに一般的である。この後者の疑問詞との共起もさほど稀なことではない。加うるに，総体化，全般化の関係文の表現において，この位置におかれる *that* はまた *sô* とも機能を同じくするものでものであるようにおもう。またこの機能が不定的で概括的総体化，全般化および疑問詞の構文といかに密接な関係にあるかを示しているということと併せて，その一方で言語にあっては，一つのあるカテゴリーが別のカテゴリーに変動するということはさして珍しいことではないという，ことを証する一例でもあると説明している。

ここでこの論者の言う *so* と *that* 機能の面で相通するとしているが，*sô* のどのような機能を指していっているのか筆者には量りかねるところがある。もし彼のいうところのものが *whosoever* などの疑問詞につくものを指しているとしたら，これはまさしく古代西ゲルマン語の *sô wer sô* の後の *sô*，すなわちゴート語の *swē* まで遡及することのできるものであり，しかも用法においても互いに命運を分かちあっているといえる。この近代英語の *whosoever* の *so* も消えていく運命にあった。このようにみてみると，英語史や英語統語論の研究においても，本稿で扱ってきた構文に関しては問題になっており，論議をよんでもいるようである。しかしこの構文の起源を問うということになると，どうしても個別言語内では解決できない部分が残ることになる。そこで，古代ゲルマン語を北と東と西の広い領域にわたって比較することによって，この構文の統語論的成立の起源にあるものと，その本質ならびに特性をいろいろの視点から多角的に考究し論証するように試みてきたつもりである。いずれにしても，この構文が西ゲルマン語において特に顕著にして，急速な成長を見るに至ったのも，これらの言語地域では特に疑問詞形不定代名詞の意味機能の衰退，それは全般的，総称的に統括するなかで普遍化をもたらす意味機能の消失，わけても条件的な要素を内包する統語論的機能の喪失に起因すると考えるのである。

さらに次に例示する Tatian からの引用例とその部分に相当するゴート語聖書訳とを比較対照することによって，西ゲルマン語と東及び北ゲルマン語がそれぞれの史的展開の過程で疑問形不定代名詞が受けた変動を物語る好個の例証をここにみてとることができる。

Tatian176,2

inti nist dir thurft thaz thih *ioman* frâgê

（そして誰もあなたに尋ねる必要はあなたにとってはありません）

この部分のラテン語文では疑問形不定代名詞 *quis* が立っている。

non opus est tibi ut *quis* te interrogetp

それに対して Tatian では *ioman* と新しい古代ドイツ語の不定代名詞がつかわれている。ではゴート語ではいかがかというに，ここではラテン語と同じく疑問形不定代名詞 *hwas* が使われているのである。

J. 16,30

jah ni *þ*arft ei *þ*uk *hwas* fraihnai

この一事をもってしても西ゲルマン語，なかでも古代ドイツ語では逸速く疑問形不定代名詞があらたに新奇の語によって置き換えられていく模様を知る手掛かりを窺うことができる。

本稿の表題に掲げる *sô* (*h*)*wer sô* の構文もこうしたゲルマン語の歴史的な展開の経路の一齣の生み出せる特異な現象の一つということができる。

これを古代ドイツ語についてみるとき，そこでは *sô wer* に本来的に具わる不定代名詞的な意味機能と，*sô* のもつ接続詞的機能とが相俟って，ある種の不定的な意味合いをもった条件文が生まれでてくる。ここにもう一つの *sô* が付け加わることによって，あらたに全般的で且つ普遍化の意味機能をもった語法が付随して発生してくる。こうしたなかで，ドイツ語表現の空隙が埋められた。そうした事情を反映して古代ドイツ語の文献にはこうした現象の移行過程（Übergangserscheinung）が散見されるのである。

【補遺】

（拙稿を書き上げてから本稿の論題に関係する比較的新しい論文を入手することができたので，紹介しておきたい。なお若干の筆者の

批判的所見を加えて述べておく。まず論者とその表題から紹介すると，

J.Erben：Syntaktische Untersuchungen zu einer Grundlegungder Geschichte der indefiniten Pronomina im Deutschen (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur. Bd.721950)

この論文のなかで論者 Erben は古代ドイツ語にみられる不定代名詞を網羅的に列挙して，その用法を逐一説明している。そのなかで古代ドイツ語では疑問詞形不定代名詞がすでに代名詞としての機能を喪失して，それに代わって，あらたに *ioman, iowiht, wiht* が使われるようになったことや，*wer* に代わって *ioman* が用いられるようになったことには言及しているものの，*wer* が本来そのほかに筆者が本文の中でも例証したように *jeder* の意味機能を持ち合わせていたことについては一言もふれていない。なおさらに，古代ドイツ語がこのように疑問形代名詞をほかの語形（Wortkörper）で置き換えているのは，ラテン語のごとき文化的に進歩した言語への依拠と接近をしめすものとみなしているが，そのラテン語すら疑問形不定代名詞をそのまま不定代名詞として用いていることをここに改めて強調しておきたい。なお Erben はこの疑問形不定代名詞の用法は聖書など Übersetzungsliteratur（文献の翻訳）を通しての影響によるところがあるとも言っているが，古アイスランド語の Edda にもはっきりと疑問形不定代名詞の用法がみられるところからも，また古英語の Beowulf など翻訳の影響をほとんどうけていないと思われる文献資料にさえも，この疑問形不定代名詞の用法がみとめられることは拙論のなかで詳しく論証してきたところである。これらのことを総合してみるとき，Erben の説にはかなり独断とも管見ともうけとられかねない部分があるように思える。

疑問代名詞が時に応じて疑問詞なり，不定代名詞の二重の用法にわたって使用されることについて Erben は

> Die Doppelheit erklärt sich aus lat.(griech.) Einflu*ß*. Das im Germ. nur interrogativ gebräuliche *wer*, *welih*, *waz* kommt durch Einflu*ß* *von quis*, *qui*, *quid* bzw. *τίσ*, *τί* auch in indefiniter Verwendung auf. Es bleibt aberauf die Übersetzungsliteratur beschränkt und wirderst durch Präfixbildungen heimisch.

と専らラテン語やギリシャ語からの影響であり，接頭辞によって構成された不定代名詞がゲルマン語に固有のものであるとしているが，この点に関してはさきに Wackernagel の説明を借りて論及してもおいたし，また Erben のいうように翻訳文献に限られるものでもない。*so wer so* については次のように説明している，

> Das Simplex ist freilich im Deutschen nie heimisch ge worden, wohl aber Bildungen wie *ethes-wer* (ali-quis), *gi-hwer* (quis-que), *so wer so* (quicumque), *neiz-wer* (nescio quis). Auch sie sind im Zuge der gro*ß*en sprachschöpferischen Bewegung vom Interrogativum *wer*, *welih*, *waz* zum Indefinitum erfolgt, wozu der Schritt zu einer höheren Entwicklungsstufe abstrakteren Denkens unter wesentlichem Einflu*ß* des Christentums den Ansto gegeben (Ausdrucksnotwendigkeit abstrakterer Sachverhalte) und wobei das kulturvermittende Latein weitgehend als Vorbild eingewirkt hat.

ここでも重ねて文化の仲介役を務めるラテン語などを典拠にし，さらにそれにキリスト教文化が相乗りしたという歴史的，文化的背景がドイツ語の抽象的な表現能力の増強と，高揚に深い影響を与えたとしているが，確かに古典の文化がドイツ語に抽象能力の向上と発展に想像以上の影響を与えたことは今更言挙げするまでもない確固たる事実であるのだが，ここにみる疑問代名詞形の不定代名詞の用法の増幅と拡張にまでその影響を読み込むのは，いささか強引でもあり，牽強付会の説とみられないこともない。ところで，彼ほどの過大な評価はしないにしても，ここには古典の典籍などからの刺A激なり，影響するところがあったことは容認できる。いずれにしろ，彼はそれ以上この *sô wer sô* については言及はしていない。

注（Anmerkungen）

1) J. Wackernagel: Vorlesungen Über Syntax. S.114ff.

Wackernagel は不定代名詞のなかには，アクセントの問題を考慮の外におくならば，疑問代名詞と相重なり，疑問代名詞がそのまま即不定代名詞として用いられる場合のあることを指摘した上で，そうした疑問代名詞の用法は言語の古層に属することにも触れて，次のように説明している。

"Innerhalb der Indefinita stellen diejenigen, die mit den alten Interrogativa, abgesehen vom Akzent, zusammenfallen, den ältesten Bestand dar; sie treten aber allmählich stark zur ück und werden von Neubildungen überwuchert, die z. T. Verfeinerungen des indefiniten

Ausdrucks darstellen."

なお，このことに関しては，さらに以下に掲げる文法学者もほぼ 同じような意見をのべている。

H. Krahe/W. Meid: (1969) Germanische Sprachwissenschaft II. 9 Formenlehre.S.74 (§46, 1. Indefinit-Pronomina)

"Wie in anderen idg. Sprachen (z. B.gr.*τίσ*" irgend wer", in gewissem Umfang auch lat. *quis*) kann im Got. und Wgerm.das Fragepronomen got. *hwas* usw. als Indefinitum im Sinne von "irgendeiner" gebraucht werden."

Braune/Eggers : (1987) Althochdeutsche Grammatik. S.249 (§293)

H. Hirt : (1934) Indogermaniische Grammatik. Teil VI. Syntax I. Syntaktische Verwendung der Kasus und der Verbalformen. S. 158ff. (§116ff.)

O. Behaghel : (1923) Deutsche Syntax I. S.361 (§239)

2) この不定代名詞の用法について W. Braune は，彼の Gotische Grammatik (1972) のなかで次のように説明しているが，

(S.96. §162 Anmerkung 2.)

"Als Indefinitum 'irgend ein' wird auch das Interrogativ *hwas* gebraucht, jedoch nur auf unbestimmte Größen bezogen, besonders in negierten Sätzen, entsprechend dem Gebrauch des lat. *quis*, während sums dem lat. *quidam* entspricht."

いまここにみるように，ある種の条件のもとで，かなりの広い&使用と用法が認められるのである。

3) 疑問代名詞がそのままの形で不定代名詞として用いられるため，の構文形式上の前提となる条件については

O. Behaghel: (1923) Deutsche Syntax. Bd. I. S.365ff. (§243)

4) I. Dal : (1966) Kurze deutsche Syntax. S. 82 (§69)

Indefininite Pronomen und Adverbia

"Schon im Indogermanischen wurden dieselben Pronomina interrogativ und indefinit verwendet; dies Verhältnis hat sich im German. erhalten und dauert z. T. noch im heutigen Deutsch, besonders in der Volkssprache, fort:.....Schon im Ahd. werden jedoch im indefiniten Gebrauch meistens gewisse Elemente zum Pronomen hinzugefügt. Das Indef. *was*, heute ganz gebräuchlich, ist mhd. selten.

Bei den Indefiniten unterscheidet man ursprünglich im German. zwei Bedeutungstypen, entsprechend lat. *aliquis: ullus* (vgl. noch englisch *some: any*). Der erste drückt etwas Bestimmtes, wirklich Existierendes aus, das man nur nicht näher bezeichnen kann oder will, der zweite Typ bezeichnet etwas Unbestimmtes, dessen Existenz entweder negierten Sätzen und in Frage gestellt wird. Diese Pronomina stehen in negierten Sätzen und in Frage- und Bedingungssätzen.—Dazu kommt eine dritte Gruppe, die die Allheit bezeichnet (positiv oder negativ).

Die Bedeutung *some: any* verteilt sich got. auf *sums: hwas*. Dies Verhältnis ist noch ahd. bei den entsprechenden Pronomina bewahrt;..... Diese Pronomina kommen jedoch bald außer Gebrauch, und neue Bildungen entstehen. Mit dem Präfix *ete(s) : ete (s)wer*, *ete(s) waz ; ete(s)lich*.....Die Bedeutung *any* hatten die Bildungen mit dem Präfix ahd. *io-*, mhd. *ie-: ieman*, *iewiht* (*iht*) .....,weiter die mit dem Präfix ahd. *deh-: dehein* (*kein*),.....; auch ahd. *einig*, mhd. *einec* gehört dieser Gruppe an."

なお，この点に関しては，

Braune/Eggers; a.a.O.（前掲書）§294〜300を参照

Wilmanns:（1922）Deutsche Grammatik.Zweite Abteilung.S. 582ff.（§428）

5） Braune/Eggers: Althochdeutsche Grammatik.1987.（前掲）§295. Anmerkung 1.を参照

6） この接頭辞および接尾辞のことについては次の文法書を参照。

W. Wilmanns: a.a.O. S. 582f.

"Suffigierte Partikeln sind besonders im Gotischen beliebt....

2. g.（=gotisch〔筆者〕）-*h*, *uh*... wird in verschiedenm Sinne gebraucht

3. g.-*hun* dient dazu,den Begriff des unbestimmten quidem od.aliquis auszudrÜcken,aber nur in negativen Sätzen".

Braune/Eggers: a.a.O. S.251f.

ここにE. Wessenの説を参考までにみておこう。(Schwedische. Sprachwissenschaft.（1970）§196 S.352)

"Wahrscheinlich wurde der Übergang der Fragewörter zu verallgemeinernden Relativa durch Partikeln vermittelt, die entweder enklitisch an das Fragewort hinzugefügt wurden,（vgl. got. *hwazuh*, lat. *quicumque*,*ubicumque*）oder schwachtonig zum Satz gehören;"

7） 聖書のこの箇所に当たるTatian訳も同じ表現形式を用いて次のように訳出している。

Tatian 133, 9

alle sô manage sô quamun

8） ゴート語のSuffix -*uh*および-*ei*については

前掲書W. Wilmanns : a.a.O. S. 582f.（§428）参照

9） W. Krause:（1872）Handbuch des Gotischen.S.202（§190）参照。

またW. Wilmanns.a.a.O.S.588. §432を参照。

10） B. Kress は現代アイスランド語の文法書のなかで，このことに触れて，つぎのような説明と例文を挙げている。(Isländische Grammatik. Leipzig 1982. S.114. §277)

"Das Indefinitpronomen *hver*, *hvað* wird in Verbindung mit *sem* zum verallgemeinernden Relativpronomen: *hver sem* 'wer auch immer' *hvað sem* 'was auch immer'

Hver sá maður, sem reyndi að segja sannleikann, var í augum hansl andráð amaður.

（真実を語ろうとするものは誰であろうとも，彼の目からみると売国奴であった）（和訳は筆者）

11） この点についてはD. Wunderは以下のように説明している。

D. Wunder :（1965）Der Nebensatz bei Otfrid. S.409f.

"Als Grundbedeutung der NS（=Nebensatz）-Eibleitung mū·die Kombination einer konditionalen Satzeinleitung（*so!*）mit einem indefiniten Pronomen angesehen werden; auch wenn *so* von Haus aus keine konditionale Konjunktion ist, so wird so doch durch die sich zwangsläufig ergebende unbestimmtheit（wegen des Pron.）zu einer Konjunktion, die eine Bedingung angibt."

こうした*sô*の接続詞的な性格の成立について触れたのち，さらに次頁で

während sonst der NS überhaupt erst angibt, wer mit dem Pronomen gemein ist, steht der NS hier unverbundener im Satzgefüge（wie sonst ein kond. NS）. Die Eigentümlichkeit dieser Konditionalsätze besteht also i. a. darin, daβ die Person oder Sachverhalt des Kond. Satzes im USatz（über geordneten Satz）schon bezeichnet ist; die Fälle, in denen dies nicht

so ist, sind weitaus in der Minderheit und finden sich vor allem beim Satzgefüge, in dem der NS nachgestellt ist." (NS=Nachsatz)

E. Wessen もまた次のように言っている。a.a.O. S.353.

"Der Bedeutung nach stehen verallgemeinernde Relativsätze häufig den Konditionalsätzen sehr nahe..... Der Nachsatz hat hier eine Form, die eigentlich einen adverbialen Vordersatz voraussetzt, und keinen attributiven. Der Satz ist also eigentlich anakoluthisch.

12) O. Behaghel はこれを二つの異なった種類の構文の混交とみて，次のように言っている。(Deutsche Syntax III.§994. S.291)

"Der wgerm. Typus *so wer so* ist m. E.entstanden aus einer Mischung, an der einerseits die temporal-hypothetischen Sätze mit *so*, anderseits die bereits germanischen Sätze mit *so manag so* beteiligt sind: *so manag so*, *so oft so* sind ungefähr gleichwertig mit *so hwer so*, *so hwan* 《wenn jemand, wenn einmal》

筆者は既に *sô manag sô* と本稿に説くところの *sô hwer sô* の関係については上述したように，むしろかなり異質のものであるとみるのである。

13) O. Behaghel は彼の Syntax des Heliand (1966) の§485の脚注で (S.319脚注)

"Diese Construction, die ein Charateristicum des Westgermanischen ist, ist wohl durch Contamination entstanden: *so hue so that dot so hue that dot* (*was* ahd. häufig genug erscheint), wenn jemand das thut + *sulic* (man) , *so that dot*, *so huan so*=*so huan* , wenn einmal+*so* (wenn). Die Erklärung von Erdmann, Syntax, S. 52, der *so hwe* als, so einer' deutet scheitert daran dass in der älteren Zeit *so* nicht adnominal gebraucht wird; die Zusammenhang mit ὅστις.....ist lautlich unhaltlar.

14) Heliand から一つ例文を引用しておくと，

3863ff.
weldun sie sô hueðeres hêlagne Crist
thero wordo gewîtnon, sô he thar for themu werode gespraki,
adêldi te dôme.

(彼らは聖キリストが民衆の前で語り，処罰として言い渡すいずれの言葉にたいしてもキリストを処分しようとした)

このような *sô* と *sô* の相関 (Korrelation) のもつ機能について E.H.Sehrt は次のように説明している。

(Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis S.486) 見出し語 *sô* の項の7) *sô* oder *sô*--*sô*)

"interrogativen Pronominibus und Adverbien indefinitte Bedeutung verleihend."

がしかし語義の辞書的な説明にとどまるという点からは，これ以上の説明を求めるのは無理というべきであろう。しかしながら，いずれにしても，西ゲルマン語においては疑問代名詞に，なにがしかの補足的な要素を付加することによって疑問代名詞を不定代名詞に変換転用しているということを文法的事実として認めることができる。

15) O.Erdmann: Untersuchungen] ber die Syntax der Sprache Otfrids. I. §96. S.57.

"Wo sich das zweite *so* oder *soso* hinter den fertigen Ver- Verbindungen des comparativen so mit Adverbien: *so fram so*,*so wit soso* u.s.w. und mit indefiniten Pronominibus oder Partikeln: *so wer so*, *so wes soso*,.....zeigt, kann man bisweilen versuchen, dies zweite *so*, *soso* als eine schon relativ gewordene Partikel dem ersten als noch demonstrativ geb-

liebenen Bestandteile entgegenzustellen. Danach würde die Satzbildung I, 24, 17 *so wer manno*, *so sih buazit*, *gihoufit er mo*, *manag guat* ganz gleich stehen der oben angeführten I, 8, 1 *ther man*, *ther thaz wib mahalta*, *was imo iz harto ungimah;* doch ist unverkennbar das *so*, und zwar zusammen mit den angeführten Adverbien und Indefinitis, viel mehr in den Relativsatz hineingewachsen, als dies bei dem mit einem Subst. verbundenen *ther* anzunehmen ist, welches namentlich (.....) nie im nachgesetzten Nebensatze steht.

と言って，この二つの *sô* のうちの二番目すなわち後のものについてはすでに相関的な働きをするものになっているとして，指示詞的な性格を依然たもっている前の *so* に対置，対比させようとする試みが時になされることがありうる。しかし後に置かれた *so* は後続の副詞や不定詞と結んで関係文の中に癒合していることは疑問の余地はないとしている。

16) O. Erdmann: (1886) Grundzäge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung. S.52. §99.なお注の (9) 参照。

17) J.Kelle: (1963) Otfrid's Evangelienbuch. 3.Bd. Glossar der Sprache Otfrids. S.545. Kelle もこの *sô* (*sôsô*) について次のような説明を加えている。

"Wo dem Vergleichungssatze ein verallgemeinernder Sinn verliehen werden soll, steht *sôsô* und verstärkt *al sôsô:*

18) J. Kelle: (1963) Otfrids Evangelienbuch. 3.Bd. Glossar der Sprache Otfrids. S.550.Kelle は次のような説明を加えている。

"Häufig steht *sô*, um allgemein auf einzelne Satzes hinzuweisen

Otfrid III. 14,

allaz guat zi wâre sô flôz fon imo thâre

(まことに，よきことのすべてが，その時彼から溢れ出た)

同じく Otfrid からもう一つ例をあげれば

IV. 18, 40

weinnônes smerza sô ruarta mo thaz herza;

(泣かずにはおられないという苦しみが彼の心を揺り動かした)

またこの *sô* は次の例にみるように，名詞（句）に限らず副詞（句）をもうける。

Otfrid V. 22, 3

in êwinigo wunnî sô ferit thaz adalkunni

(いつまでも終わることのなき幸せへと，高貴な品位の方がたは歩み進む)

ここで本稿の28ページで言及した Behaghel のこの *sô* についての所説ならび見解を参照して検討してみるとき，Behaghel の説には首肯しがたいことがわかる。

19) Grimm は Deutsches Wörterbuch の見出し語 *sô* の項のところで *sô wer sô* の語結合は Ahd.（古代ドイツ語）において既に後に続く方の *sô* を省略した形のものがみられるとして，次のように述べ，以下に示すような例文を挙げている，(Bd.X,I.*sô* II,C,4. Spalte 1377)

"andrerseits wird schon in ahd. zeit das zweite so wol ausgelassen. bei folgendem zugehörigen subst.:

Tatian 44,7

in sô welîhha burg odo burgilun ir ingangget, frâgêt thanne wer in theru wirdîg sî,

in anderen fällen:

Tatian 44, 9

inti sô wer iuwich ni inphâhit noh ni hôrit iuwaru wort, ûzgangante fon themo hûs odo fon theru burgî arscutet then melm fon iuuaren fuozin in zi giwiz nesse.

Otfrid II, 9, 65

drahtô io zi guate, sô waz thir got gebiate."

がしかし，次のことを考えてみるならば，この *sô wer* と全般的普遍化の *sô wer sô* とを古代ドイツ語においては，未だ同一の意味機能をもつものと看做すには無理があるように思われるふしがある。その理由としては，次のことが考えられるからである。

例えば

Tatian 82, 10

sô wer fon themo selben ezze, ni sterbe.

（もしそれそのものを食べる人あらば，死ぬことなからむ）

82, 10

sô wer sô izzit fon themo brôte, lebêt in êwidu

（もしこのパンを食べるものあらば，そのものは誰でも永遠に生きる）

このところのゴート語訳をみてみるに，

J. 6, 51

jabai hwas matji*þ* *þ*is hlaibis, libai*þ* in ajukdu*þ* ;

と，*hwas* を使った条件文になっている。このことから推して，Grimm の引用する Tatian の 44,9も同様に条件文と解したい，すなわち

（もし汝らを歓迎するものも，また汝らの言う言葉を聴くものもないならば，その家なり，その町なりから出て，彼らの見せしめのために汝らの足の埃を振り払え）

と解釈する。Luther の訳でも，このところは，次のように条件文にしている，Mt.10, 14

"wo euch jemand nicht annehmen wird,.....,so geht heraus von demselben Haus....."

なお参考までに現代アイスランド語聖書訳も

"Og taki einhver ekki við yður né hlýði á orð yðar."

と定動詞を第一位にしたいわゆる倒置の条件文にしている。さらに説明を加えるならば，Tatian の82,10のところではラテン語では両方ともに *si quis* となっている。また現代アイスランド語では，

J. 6, 50

sá sem etur af *þ*vi, deyr ekki.

J.6, 51

hver sem etur af *þ*essu brauði, mun lifa að eilífu.

とそれぞれ文意を区別して訳している。すなわち前者には定関係代名詞的（= 英，one who）な訳を，後者には不定関係代名詞的（=英，whoever）な訳を施している。この点に関してはギリシャ語の聖書に即した訳がなされている。

D.Wunder もまたこうした古代ドイツ語の現象に触れて以下のように説明している，(Der Nebensatz bei Otfrid. S.409)

"Wir könnten also zunächst in jedem Falle *so wer so* als wenn (irgend) jemand' übersetzen; diese Bedeutung läßt sich ahd. in allen Fällen durchführen. Zunächst liegt also in die verallgemeinernde Bedeutung der Satzeinleitung vor, in dem Sinne, daß *so wer so* eine 'Anzahl von Fällen' zusammenfaßt. Freilich ist der Übergang in die verallgemeinernde Bedeutung naheliegend: wenn man von einer indefiniten Person spricht, so meint man zugleich jede Person, die den Bedingungen dieser Indefinität entspricht und spricht also von einer Anzahl von Fällen. Dennoch ist es sachgerechter, für das ahd. von indefiniten Konditionalsätzen als von verallg. RS

(=Relativsätzen) zu sprechen"

ここにWunderの言っているように，Ahd, においては *sô wer* は，ラテン語の *si quil*，ゴード語の *jadai hwas* にむしろ近い意味機能をもっており，不定的な意味合いを持つ条件を表すのに寄与していた。それがやがて全般的な普遍化の意味機能をもつところの *sô wer sô* に繋がれのであるが，古代ドイツ語では，まだその移行過程にあったことを上の例は示しているものとみることができる。そこで、*sô wer* に全般的で普遍化の意味機能を付与するのに力を貸したのが，これに続く *sô* であったのではなかろつうか。

20) この箇所Otfrid 111. 17. 39.と 111. 18. 3 にみるところの *thaz* についてP. Piper次のように説明している。

(Otfrids Evangeliench. 1887 S. 482)

"Mit den Pron. pers. vertritt es dann oft das Relativ."

すなわち（指示代名詞）*thaz* が人称代名詞と結んで関係代名詞の役をなすということを指摘している。

なお，ついでに *sô hwer sô* の構文において，人を指してはいるものの中性形で現わる例を挙げておくと，

Heliand. 4383f.

than sculun tharod heliðo barn.

elitheoda kuman alla tesamane

libbeandero liudho, sô huat sô io an thesumu liohte warð

firiho afôdid,

（そのとき，もののふの子ら，この世の民，生きとし生けるもの，この世に生まれ来しものは誰しもみなともに，そこに集まり来るであろう）

ここでは，*barn* が中性複数，*elithioda* が女性複数などの両性にわたる名詞に関するが故に中性が使われている。

なお，それ以外に人称代名詞を先行詞とする関係代名詞も中性形の *thaz* がつかわれる，

Otfrod I. 17. 1

nist man nihein in worolti　　thaz saman al irtagêti

wio manag wuntar wurti　　zi theru druhtînes giburti

（主の誕生の際に，どれほど多くの不可思議なことがおこったかを，一部始終語ることのできる人はこの世にはひとりもいない

21) D. Wunderもこの点に関して次のような疑義を狭んでいる，a. a. O. S120

"Eine relative Bedoutung (=nhd. *wie*) scheidet aus, da ein solches *so* in diesem Zusammenhang bedeutungsmäßig sinnlos wäre. Behaghels Erklärung—konditionales *so*—scheidet für uns auch aus, da wir diese Bedeutung schon für das erste *so* in Anspruch nehmen. Man könnte auch—überprüft man des Gebrauch der Partikel *so* im ahd. —an wie-deraufnehmendes *so* denken, vgl.

IV. 18: 40

weinonnes smerza　　so ruarta mo thaz herza

In diesem Beispiel bezieht sich *so* auf das vorausgehende Subjekt; diese Verwendung von *so* ist sehr gebräuchlich; in unserem Falle könnte man also daran denken. daB *so* das Indefinitpronomen wieder aufnähme—ein sonst nicht belegter Gebrauch—oder noch einmal den vorherigen Kontext (bzw. den vorauszusetzenden Zusammenhang), nachdem das erste *so* ja eine nene Aufgabe erhalten hatte.

Eventuell könnte *so* analogisch, nach dem Beispiel des ersten Typs, in diese Sätze eingedrungen sein ; festzustehen scheint mir, daβ es schon ahd. funktionslos war, sonst könnte es nicht bei Notker schon in der Mehrzahl der Fälle fehlen. Allerdings steht es noch bei Otfrid in den meisten Belegen: es fehlt bei *wer* 6mal (von 37 Fällen), bei *waz* 1mal (von 13mal), bei *war* 4mal (von 11mal)—Schlieβlich könnte es vorübergehend in der Entstehungszeit eine gewisse Funktion, durch Mischung von Analogiebildung und eigener Bedeutung gehabt haben, dann aber nach Konsolidierung der Koniunktion bedeutungslos geworden sein und *so* geschwunden sein.

ここでWunderがder erste Typといっているのは，彼も指摘しているように，
Gotisch werden diese Sätze mit '*swa* und einem quantitativen Begriffa, (a. O. S. 116f.) an den sich ein Satz mit *swa* anschlieβt' eingeleitet, also *swa filu/ lang/ hweila/nanagai/ ufta swe* usw. Ahd. bei Otfrdd kommen die Adverbien *fram, rumo. sliumo. wit" (o)* in dieser Art der Satzeinleitung vor.

筆者もこの点については本論のなかで述べたように，これはゲルマン語にはかなり早くからみられる語法の一てで，*swā* と *swā* の間に数量に関する形容詞，もしくは時間，空間に関する副詞のくるような語結合が副文を導入する *Satzeinlitung* として用いられるようになる。*Wunder* もこの語結合と区別しタイプを挙げて上にみるような解釈をしている。すなわち二つの *sô* のうちの後者の方には，関係詞的な意味は前後の関係て，もう一つのタイプを挙げて上にみるような解釈をしている。すなわち二フの *sô* のうちの後者の方には，関係詞的に意味は前後の関係からみて先ず持ちえないし，条件を表すような意味機能もまた想定し難いとしている。

なお，このことに関してはGrimmのDeutsches Wörterbuch見出し語 *sô* の項を参照。(*sô, 11, c, l. b.* Spalte 12371,)

念のために申し添えておくと，WunderがOtnfridのIV. 18, 40のところで挙げている型の *sô* については注の15)を参照。

22) W. Admoniはこのような *sô* の多義性および機能の多岐性について例を挙げて次のように説明している。

(Historische Syntax des Deutschen. 1990. S. 64)

"Die Form *sô* tritt zuweilen als selbständige Konjunktion auf,mit einer temporalen, konzessiven und kausalen Bedeutung, z. B. *sô si in ira hûs giang* (Otfrid I 6, 3) 'Als sie in ihr Haus ging'. Doch dient *sô* oft auch als Unterstuzung anderer Wortformen in der Funktion der unterordnenden verallgemeinernden Konjunktionen, *sô wer sô wola wolle* (Otfrid I 1, 123('wer (jeder, der) es wohl wolle'. Die Verdoppelung von *sô* führt nicht zur Relativierung. sondern zur semantischen Verallgemeinerung der Form *wer*.

Admoniもこうした *sô* の二重の使用は相互に関連するところの相関性の成立につながるものではなくて，*war* という語に全般化，普遍妥当的な意味合いを付与添加させるためのものであるとしている。しかし *sô* の *wer* を狭んでの二重の使用については言及してはおらず，*sô* に関しては，とりわけ態度が曖昧であると言わざるをえない。

略語説明 (Erklrung der Abkrzungen)

Br..... Brot af Sigurðarqviðo（シグルズの歌の断片）
C..... Kolosser（コロサイ人への手紙）(*Der Brief des Paulus an die Kolosser*)
Fm..... Fáfnismál（ファーフニの歌）

Háv..... Hávamál (オーディンの箴言)
Hrbl..... Hárbarǒzlioð (ハールバルズの歌)
J..... Johannes (ヨハネ福音書) (*Das Evangelium des Johannes*)
K..... Korinther (コリント人への手紙) (*Der Brief des Paulus an die Korinther*)
L..... Lukas (ルカ福音書) (*Das Evangelium des Lukas*)
Mk..... Markus (マルコ福音書) (*Das Evangelium des Markus*)
Mt..... Matthus (マタイ福音書) (*Das Evangelium des Matthäus*)
pr..... Prosastück (エッダの詩のなかで散文で書かれている部分)
R..... Römer (ローマ人への手紙) (*Der Brief des Paulus an die Römer*)
Rm..... Reginsmal (レギンの歌)
Th..... Thessalonicher (テサロニケ人への手紙) (*Der Brief des Paulus an die Thes salonicher*)

参考文献 (Benutzte Materialien)

I 刊本 (Texte)

1. Altenglisches Lesebuch für Anfänger, hrsg. v. M. Förster. siebente, unveränderte Auflage Heidelberg 1963
2. Althochdeutsches Lesebuch zusammengestellt und mit Wörterbuch versehen v. W. Braune, fotgesetzt v. K. Helm, bearbeitet v. E. A. Ebbinghaus. 14. Auflage. Tübingen 1965
3. Altnordisch-isländisches Lesebuch, hrsg. v. W.H.Wolf-Rottkay. 1. Auflage. München 1967
4. Beowulf and the fight at Finnsburg,edited, with introduction, bibliography, notes, glossary, and appendices by Fr Klaeber. 3. Edition with first and second supplements. Lexington, Massachusetts 1950
5. Beowulf (Heyne-Schücking), hrsg. v. E. v. Schaubert. 1.Teil: Text, 2. Teil: Kommentar, 3. Teil: Glossar. 17. 1 Auflage erneut durchgesehen. Paderborn 1963
6. Beowulf edited by C. L. Wrenn, fully revised by W. E. Bolton. London 1973
7. Beowulf und die kleineren Denkmäler der altenglischen Heldensage Waldere und Finnsburg mit Text und Übersetzung, Einleitung und Kommentar sowie einem Konkordanz-Glossar in drei Teilen, hrsg.v. G. Nickel. 1. Teil:Text, Übersetzung, Namenverzeichnis und Stammtafeln, bearbeitet v.J. Klegraf, W.Kühlwein, D. Nehls und R. Zimmermann mit zwei Faksimiles der Beowulf-Handschrift.Heidelberg 1976. 2.Teil:Kommentar, mit Einleitung, Sachregister und Literaturverzeichnis, bearbeitet v. J.Klegraf, W. Kühlwein, D. Nehls und R.Zimmermann. Heidelberg 1976. 3. Teil: Konkordanz und Glossar,bearbeitet v. J. Strauβ. Heidelberg 1982
8. Das Nibelungen Lied nach der Ausgabe v. K.Bartsch, hrsg. 3 v. H. de Boor. 21. Auflage. Wiesbaden 1979
9. Der althochdeutsche Isidor nach der Pariser Handschrift und den Monseer Fragmeneten, neu herausgegeben v.H. Eggars. ATB 63. Tübingen 1964
10. Die gotische Bibel, hrsg. v. W. Streitberg. Heidelberg 1950
11. Die Gedichte Walters von der Vogelweide. 2. Ausgabe v.K. Lachmann. Berlin 1843
12. Die ältere Genesis mit Einleitung, Anmerkungen, Glossar und der lateinischer Quelle, hrsg. v. F. Holthausen. Heidelberg 1914

13. Die Lieder des Codex regius nebst verwandten Denkmälern. 1. Teil: Hrsg. v. G. Neckel, 4. umgearbeitete Auflage von H. Kuhn. Heidelberg 1962. 2.Teil: Kurzes Wörterbuch von H. Kuhn,3.umgearbeitete Auflage des kommentierenden Glossars. Heidelberg 1968
14. Heliand nebst den Bruchstücken der altsächsischen Genesis mit ausführlichem Glossar, hrsg.v. M.Heyne. 4. Auflage. Bibliothek der ältesten deutschen Literatur-Denkmäler. 2. Band. Altdeutsche Denkmäler 1. Teil. 4. Auflage. Paderborn
1905
15. Heliand und Genesis, hrsg.v. O. Behaghel. 8. Auflage,bearbeitet v. W. Mitzka. ATB 4. Tübingen 1965
16. Iwein. Urtext und Übersetzung.Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff. Übersetzung und Anmerkungen von Th. Cramer. 3. durchgesehene und ergänzte Auflage. Berlin/New York 1981
17. Otfrids Evangelienbuch, hrsg. und erklärt v. O. Erdmann. Halle a. S. 1882
18. Otfrids Evangelienbuch, hrsg. v. O. Erdmann. 6. Auflage, 4 bearbeitet v. L. Wolff. ATB 49 Tübingen 1973
19. Parzival, Mittelhochdeutsch/ Neuhochdeutsch. Reclam UB 3681-3682 Stuttgart 1977
20. Tatian.Bibliothek der ältesten deutschen Literatur-Denkmäler 5. Band. Lateinisch und Deutsch mit ausführlichem Glossar, hrsg. v. E. Sievers, 2. neubearbeitete Ausgabe. Paderborn 1892
21. Tristan, Mittelhochdeutsch/ Neuhochdeutsch. Reclam UB 4471-4472 Stuttgart 1980
22. Ulfilas veteris et novi Testamenti versionis gothicae Fragmenta quae supersunt ediderunt H.C. de Gabelentz et J. Loebe. Vol. 1. Textum continens. Vol.II.Glossarium linguae gothicae continens,beigedruckt ist Grammatik der gotischen Sprache und uppströms codex argenteus. Eine Nachschrift zu der Ausgabe des Ulfilas.Neudruck der Ausgabe.Leipzig 1843, 1846 u. 1860. Hildesheim 1980
23. Walter von der Vogelweide. Sämtliche Lieder. UTB 167 München 1972

II 翻訳 (Übersetzungen)

1. Anglo-Saxon Poetry,translated by R. K. Gordon.Everyman's Library 794 London 1970
2. Beowulf und das Finnsburg-Bruchstück, aus dem Angelsächsischen übertragen von F. Genzmer Reclam UB 430. Stuttgart 1968p
3. Beowulf. A Verse Translation by M. Alexander. Penguin Books L268 1974
4. Beowulf and the Finnsburg Fragment by J. R. C. Hall/C.L.) Wrenn,J. R. R. Tolkien. London 1980
5. Christi Leben und Lehre besungen von Otfrid,aus dem alt-7 hochdeutschen übersetzt von J. Kelle. Prag 1870
6. Die Edda, übertragen von F.Genzmer. Eugen Dietrichs Verlag. Düsseldorf/Köln 1956
7. Die Götterlieder der älteren Edda.Auswahl nach der Übersetzung von K. Simrock, neu bearbeitet und eingeleitet von / H. Kuhn. Reclam UB 781. Stuttgart 1969
8. Die Edda II. Die Heldenlieder der älteren Edda nach der Übersetzung von K. Simlock, neu bearbeitet und eingeleitet 3 von H. Kuhn. Reclam UB 783-784 Leipzig 1947
9. Die Edda: Götter-und heldenlieder der Germanen, aus dem Altnordischen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von A. Häny. Zürich 1987

10. Edda. I. Heldendichtung 3. Auflage 1972 II. Götterdichtung. Eugen Dietrichs Verlag. Düsseldorf/Köln 1963
11. Heldenlieder der Edda. Auswahl, übertragen, eingeleitet und erläutert von F. Genzmer. Reclam UB 7746 Stuttgart
12. The elder Edda, a selection translated from the Icelandic by P. B. Tayler/W. H. Auden, P. H. Salus. London 1973
13. Heliand und die Bruchstücke der Genesis, aus dem Altsächsischen und Angelsächsischen übertragen von F.Genzmer. , Reclam UB 3324-3325 Stuttgart 1966
14. The Heliand translated from the Old Saxon. University of North Calolina Studies in the Germanic languages and Literatures Number 52. 1966
15. エッタ　谷口幸男訳　新潮社　1973
16. 聖書　フェテリコ・ハルハロ訳　講談社　1980
17. 福音書　塚本虎二訳　岩波書店　第二十一刷　1980
18. ヘーオウルフ　厨川文夫訳　岩波書店　第四刷　1977

III. 研究書 (Literaturen)

1. Admoni, W.: Historische Syntax des Deutschen. Tübingen 1990
2. Behaghel, O.: Deutsche Syntax I. II. III. IV. Heidelbergp 1923, 1924, 1925, 1932
3. Behaghel, O.: Die Indefinitpronomina *Hwas* und *Sums* (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur Bd. 42. 158ff. 1916
4. Behaghel, O.: Syntax des Heliand. Wiesbaden 1966
5. Betten, A.: Grundzüge der Prosasyntax. Tübingen 1987
6. Braunmüller, K.: Syntaxtypologische Studien zum Germanischen. Tübingen 1982
7. Braune,W.: Gotische Grammatik mit Lesestücken und Wörterverzeichnis. 18. Auflage, neu bearbeitet von E. A. Ebbinghaus. Tübingen 1973
8. Braune, W./H. Eggers.: Althochdeutsche Grammatik. Tübingen 1987
9. Brinkmann, H.: Studien zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur. Bd. I. Düsseldorf 1965
10. Brunner, K.: Altenglische Grammatik. Tübingen 1965
11. Campell, A.: Old English Grammar. Oxford 1977
12. Dal, I.: Kurze deutsche Syntax. Tübingen 1966
13. Ebert, R. P.: Historische Syntax des Deutschen. Sammlung Metzler 167. Stuttgart 1978
14. Eggers, H.: Deutsche Sprachgeschichte I. Hamburg 1968
15. Einarsson, S.: Icelandic Grammar. Text and Glossary. Baltimore and London 1979
16. Erben, J.: Syntaktische Untersuchngen zu einer Grundlegung der Geschichte der indefiniten Pronomina im Deutschen (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur Bd. 72) 1950
17. Erdmann, O.: Grundzüge der deutschen Syntax. Stuttgart 1886
18. Erdmann, O.: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. 2 Teile in 1 Band. Hildesheim 1973
19. Feuillet, J.: Linguistique diachronique de l'allemand. New York/Paris 1989
20. Gering, H./B. Sijmons: Kommentar zu den Liedern der Edda 2 Bde. Halle 1927-1931
21. Greule, A.: Valenz Satz Text. Syntaktische Untersuchungen zum Evangelienbuch Otfrids von Weîenburg auf der Grundlage des Codex Vindobonensis. München 1982

22. Havers, W.: Handbuch der erklärenden Syntax. Heidelberg 1931
23. Heusler, A.: Altisländisches Elementarbuch. Siebente, unveränderte Auflage. Heidelberg 1967
24. Hirt, H.: Handbuch des Urgermanischen. III.Teil. Heidelberg 1932
25. Hirt, H.: Indogeranische Grammatik. Teil VI. SYntax I (Syntaktische Verwendung der Kasus und der Verbalformen)
26. Holthausen, F.: Altsächsisches Elementarbuch. Heidelberg 1899
27. Kivimaa, K.: The Pleonastic That in Relative and Interrogative Constructions in Chaucer's Verse. Commentationes Humanarum Literaru. Societas Scientiarum Fennica. Vol. 39 Nr. 3. 1966
28. Krahe, H./ W. Meid: Germanische Sprachwissenschaft.I.II. 8 III. Sammlung Göschen 238/238a/238b. Berlin 1969
29. Krause, W.: Handbuch des Gotischen. Dritte, neu bearbeitete Auflage. München 1968
30. Krahe, H.: Grundzüge der vergleichenden Syntax der Indo- germanischen. Innsbruck 1972
31. Kress, B.: Isländische Grammatik. Leipzig 1982
32. Lehnert, M.:Altenglisches Elementarbuch.Sammlung Göschen 5215 Berlin 1973
33. Lockwood, W. B.: Historical German Syntax. Oxford 1968
34. Maurer, F.:Untersuchungen über die deutsche Verbstellung —— in ihrer geschichtlichen Entwicklung —— Heidelberg 1926
35. Mitchell, B.: A Guide to Old English. Second Edition. London 1964
36. Paul, H./ L. E. Schmitt: Mittelhochdeutsche Grammatik. Fortgeführt von E. Gierach. 5. Auflage, bearbeitet von L. E.Schmitt. Die Satzlehre von O. Behaghel. Halle/Saale 1950
37. Paul/Moser/Schröbler/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik Tübingen 1982
38. Ranke,F./D.Hofmann: Altnordisches Elementarbuch.Sammlung Göschen 115/115a/115b Berlin 1967
39. Scaglione, A.; Komponierte Prosa von der Antike bis zur Gegenwart. 2.Bd. Die Theorie der Wortstellung im Deutschen
40. Sommer, F.: Vergleichende Syntax der Schulsprachen. 3. Auflage. Leipzig/Berlin 1931
41. Streitberg, W.: Gotische Syntax. Heidelberg 1981
42. Tschirch, F.: Geschichte der deutschen Sprache. I.II. Berlin 1966
43. Wackernagel, J.: Vorlesungen über Syntax.I.II.Basel 1950
44. Weimann, K.: Einführung ins Altenglische. UTB 1210 Heidelberg 1982
45. Wessen, E.: Schwedische Sprachgeschichte III. Berlin 1970
46. Wunder, D.: der Nebensatz bei Otfrid. Heidelberg 1965

Ⅳ辞書 (W¥rterbücher)

1. Baetke, W.: Wörterbuck zur altnordischen Prosaliteratur. Berlin 1965
2. Benecke,G. F./ W. Müller, F. Zarncke:Mittelhochdeutsches Wörterbuch I. II . II . III. Hildesheim 1963
3. Bosworth,T.: Anglo-Saxon Dictionary, edited and enlarged by T. N. Toller. Oxford 1980
4. Braasch,T.:Vollständiges Wörterbuch zur sog.Caedmonschen Genesis. Heidelberg 1933
5. Cleasby, R./G.Vigfusson: An Icelandic-English Dictionary Second Edition, with a Supplement by Sir W. H. Craigie. Oxford 1959

6. de Vries, J.: Altnordisches etymologisches Wörterbuch. Leiden 1962
7. Eggers, H.; Vollständiges Lateinisch-Althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzung. Berlin 1960
8. Fritzner, J.:Ord Bog over Det gamle norske Sprog I.II.III Oslo-Bergen-Tromso 1973
9. Gering, H.: Glossar zu den Liedern der Edda. Bibliothek der ältesten deutschen Literatur -Denkmäler. Paderborn 1907
10. Gering, H.: Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda. Hildesheim 1971
11. Holthausen, F.: Gotischees etymologisches Wörterbuch. Heidelberg 1934
12. Kelle, J.: Glossar der Sprache Otfrids. Aallen 1963
13. Kuhn, H.: Edda, die Lieder des Codex regius nebst verwandten Denmälern, hrsg. v. G. Neckel. II. Kurzes Wörterbuch.3.umgearbeitete Auflage des kommentierenden Glossars Heidelberg 1968
14. Lexer, M.: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch I.II.III. Tokyo 1970
15. Lexer, M.: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch.33.Auflage. Stuttgart 1972
16. Möbius, Th.: Altnordisches Glossar. Darmstadt 1963
17. Nickel, K.: Beowulf und die kleineren Denkmäler der altenglischen Heldensage Waldere und Finnsburg. 3.Teil: Konkordanz und Glossar, bearbeitet von J. Strauβ. Heidelberg 1982
18. Piper, P.: Otfrids Evangelienbuch mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriβ der Grammatik. Freiburg 1887
19. Schade, O.: Altdeutsches Wörterbuch I.II. Hildesheim 1969
20. Schücking, H.: Beowulf.3.Teil:Glossar.München/Paderborn/ Wien 1961
21. Schulze, E.: Gotisches Glossar. Magdeburg 1847
22. Schützeichel, R.: Althochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1969
23. Sehrt, E. H.: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis. 2. durchgesehene Auflage. Göttingen 1966
24. Streitberg, W.: Die Gotische Bibel. 2.Teil: Gotisch-Deutsches Wörterbuch. Heidelberg 1965